
坂戸市

金井遺跡B区II

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

- X -

2000

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じています。その中のひとつとして、快適でうるおいのある生活空間の形成のために、緑豊かな、快適で美しい住宅市街地の整備を目的として、土地区画整理などによりゆとりある快適な住宅市街地の整備、自然や歴史、文化を生かした、美しい家並みの住宅地づくりなどを促進しています。

坂戸市入西地区土地区画整理事業は、住宅・都市整備公団（現名称：都市基盤整備公団）により、住宅対策及び地域環境整備計画の一環として計画されました。

事業用地内には、埋蔵文化財包蔵地が存在しており、古墳時代から中世にわたる遺跡であることがわかっていました。

その取扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。調査につきましては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、道路建設課の委託を受け当事業団が実施しました。

坂戸市は、多くの遺跡が存在する所として知られておりますが、特に入西地区周辺は、台地上には古墳群が広く分布し、水田地帯には古代の土地区画である条

里地割が残っています。さらに、越辺川を挟んで北の丘陵には関東地方でも有数の窯跡群のひとつである鳩山窯跡群があります。そして、区画整理事業に伴う一連の調査では11か所の遺跡が調査され、古代の集落や遺存状態の良い方形周溝墓、中世の鍛造遺構など例のない貴重な発見がありました。

今回は、大形の建物跡を検出し、先の調査と合わせて中世の鍛造遺跡の具体的な構成に関する知見が得られました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として、広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、住宅・都市整備公団、坂戸市教育委員会並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、坂戸市に所在する金井遺跡B区の発掘調査報告書である。
2. 遺跡番号、略号、代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
No60-119
KNIB 2
坂戸市大字新堀字金井330番地1他
平成11年4月28日付け教文2-12号
3. 発掘調査は、坂戸入西地区土地区画整理事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が調整し、住宅・都市整備公団の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となり実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、中村倉司、若松良一、西井幸雄、渡辺清志が担当し、平成11年4月1日から平成11年11月30日まで実施した。整理報告書作成作業は木戸春夫が担当し、平成11年12月1日から平成12年3月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量は、新日本航測株式会社に委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真撮影は各担当者が行った。遺物写真撮影は木戸が行った。
7. 出土品の整理・図版の作成は、桜井元子の協力を得て木戸が行い、鑄造関係遺物は赤熊浩一が行った。
8. 本文の執筆は、I-1を埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が、IVの鑄造関連遺構と鑄造遺物及びVを赤熊が、それ以外は木戸が行った。
9. 本書の編集は木戸が行った。
10. 本書にかかる資料は平成12年度以降、埼玉県埋蔵文化財センターが保管する。
11. 本書の作成にあたり下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
坂戸市教育委員会・県立自然史博物館

凡例

1. 遺跡全測図におけるX・Y座標値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示す。また、遺構図における方位は、全て座標北を示している。
2. グリッドは12m×12m方眼で設定し、グリッドの呼称は、北西隅の杭番号である。
3. 遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
遺構図 住居跡・掘立柱建物跡・土塋…1/60
井戸跡・溝跡…1/80
遺物図 土器…1/4 石製品・土製品・拓本…1/3
上記に合わないものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度示している。
4. 全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。
S J・住居跡 SE・井戸跡 SK・土塋 SD・溝跡
SS・鑄造関連遺構 ST・火葬墓
遺構図中のドットは、遺物の出土位置を示す。
5. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位mである。
6. 本書に掲載した地形図は、以下のものを使用した。
国土地理院 1/25000地形図「武蔵小川」
「越生」「東松山」「川越北部」

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 発掘調査の概要	
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	2
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3
II 遺跡の立地と環境	
1 立地	4
2 歴史的環境	5
3 入西遺跡群の概観	9
III 遺跡の概要	14
IV 遺構と遺物	
1 古代	
(1) 住居跡	20
2 中世	
(1) A地点	24
ア 鋳造関連遺構	25
イ 竪穴状遺構	30
ウ 粘土探掘壕	31
エ 掘立柱建物跡	31
オ 井戸跡	36
カ 溝跡	37
キ 火葬墓	43
ク 土壌	45
ケ グリッド出土遺物	46
(2) B地点	
ア 鋳造関連遺構	47
イ 粘土探掘壕	47
ウ 掘立柱建物跡	48
エ 井戸跡	56
オ 溝跡	58
カ 土壌	60
(3) 鋳造遺物	63
V まとめ	69

挿 図 目 次

第1図	地形断面模式図	4	第32図	第29号掘立柱建物跡	34
第2図	埼玉県の地形	5	第33図	第30号掘立柱建物跡 (1)	35
第3図	金井遺跡A・B区と足洗遺跡	6	第34図	第30号掘立柱建物跡 (2)	36
第4図	周辺遺跡分布図	7	第35図	第15号井戸跡	37
第5図	入西遺跡群	10・11	第36図	第15号井戸跡出土遺物	38
第6図	金井遺跡B区全体図	14・15	第37図	溝跡 (1)	40
第7図	金井遺跡B区A・B地点全測図	18	第38図	溝跡 (2)	41
第8図	古代の遺構全体図	19	第39図	溝跡 (3)	42
第9図	第15号住居跡	20	第40図	溝跡出土遺物	43
第10図	第31号住居跡	21	第41図	第17・18号火葬墓	44
第11図	第32号住居跡出土遺物	21	第42図	土壌	45
第12図	第32号住居跡	22	第43図	グリッド出土遺物	46
第13図	中世の遺構全体図	23	第44図	B地点の遺構	47
第14図	A地点の遺構	24	第45図	第292号土壌	48
第15図	第16号鑄造遺構群	25	第46図	第279・281号土壌・出土遺物	48
第16図	第1号鑄造土壌	26	第47図	第31号掘立柱建物跡 (1)	49
第17図	第2号鑄造土壌	26	第48図	第31号掘立柱建物跡 (2)	50
第18図	第3号鑄造土壌	26	第49図	第31号掘立柱建物跡 (3)	51
第19図	第4・5号鑄造土壌	27	第50図	第31号掘立柱建物跡出土遺物	52
第20図	第6・7号鑄造土壌	27	第51図	第32号掘立柱建物跡	52
第21図	第8・9・17号鑄造土壌	27	第52図	第33号掘立柱建物跡	53
第22図	第10・11号鑄造土壌	28	第53図	第34号掘立柱建物跡	54
第23図	第15号鑄造土壌	28	第54図	第35号掘立柱建物跡	55
第24図	第18号鑄造土壌	28	第55図	第36号掘立柱建物跡	56
第25図	第17号鑄造遺構群	29	第56図	第16・17号井戸跡	57
第26図	第1・2・3号鑄造土壌	29	第57図	井戸跡出土遺物	58
第27図	第16・17号鑄造遺構群出土遺物	30	第58図	溝跡	59
第28図	第85号土壌	30	第59図	溝跡出土遺物	60
第29図	第272・273号土壌	31	第60図	土壌	61
第30図	第27号掘立柱建物跡	32	第61図	鑄造関連遺物	64
第31図	第28号掘立柱建物跡	33	第62図	鑄造遺物出土分布図	70

表 目 次

第1表 鑄造遺物計量表 (1)	63	第3表 鑄造遺物計量表 (2)	66
第2表 鑄造遺物觀察表	65	第4表 鑄造遺物計量表 (3)	68

図 版 目 次

図版1 第32号住居跡 遺物出土状況 第32号住居跡竈 A地点南側遺構分布状況 (東カ・6)	第283号土壙 第284号土壙
図版2 第16鑄造遺構群 (SSK1・2) 第16鑄造遺構群 (SSK3・10・11) 第17鑄造遺構群 (SSK1-3) 第272・273号土壙 (粘土探掘壙) 第28号掘立柱建物跡 第15号井戸跡	図版6 第32号住居跡出土遺物 (第11図3) 第60号溝跡出土墨書土器 (第40図14) 第271号土壙出土遺物 第279号土壙出土遺物 (第46図1) 第15号井戸跡出土遺物 (1) (第36図)
図版3 第54・55号溝跡 第56号溝跡 第59号溝跡 第17号火葬墓 第112号土壙 (竪穴状遺構) 第292号土壙 (竪穴状遺構)	図版7 第15号井戸跡出土遺物 (2) (第36図) 第16・17号井戸跡出土遺物 (第57図) 溝跡出土遺物 (第59図)
図版4 第31号掘立柱建物跡	図版8 銅型・とりべ (第61図) 鉄製品 (第61図) 不明土製品 (第61図) 鉄滓・羽口 (第61図) 炉壁 (第61図)
図版5 第32・33・34号掘立柱建物跡 第35・36号掘立柱建物跡 第17号井戸跡 第277号土壙	図版9 鉄滓断面 (第61図10) 炉壁断面 (第61図12) 炉壁断面 (第61図13) 炉壁断面 (第61図14) 炉壁断面 (第61図17) 羽口 (第61図18)

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

首都圏における人口増加は著しく、今や全国の人口の約1/3が集中している。埼玉県や都市基盤整備公団では、そうした人口増加に対応するため、住宅政策や地域環境の整備計画を進めているところである。坂戸市入西（西部）地区については、住宅・都市整備公団（当時）による区画整理方式により宅地開発事業が計画された。

住宅・都市整備公団は、昭和40年に当時の日本住宅公団と文化財保護委員会との間で交わされた「日本住宅公団の事業施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づいて、埼玉県教育委員会へ「坂戸市入西（西部）地区における埋蔵文化財取扱いについて」照会した。

県教育委員会は昭和56年1月20日付け教文第918号をもって次のとおり回答した。

1 文化財の所在

名 称	所 在 地	種 別	時 期
坂戸市No.99 柵塚古墳	坂戸市大字堀込 字桑原157	古墳	古墳時代 後期

上記の他に糸原遺跡及び知地部分に集落遺跡の存在が予想される。

2 取扱いについて

(1) 開発予定地内は事前の遺跡分布調査及び必要に応じて試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する必要がある。

(2) 上記の結果をもとに埋蔵文化財ができるだけ現状保存できる開発計画を策定することが望ましい。

(3) 計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定により、事前に文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出して、記録保存のための発掘調査を実施すること。

住宅・都市整備公団（当時）と県教育委員会では、開発地域内に所在する遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託して、昭和59年度から発掘調査を実施することとなった。

金井遺跡B地区の調査は平成元年4月1日から平成2年9月30日まで行われ、すでに発掘調査報告書も刊行されている。しかし、墓地及び一部宅地の移転が遅れたことから、平成11年4月1日から11月30日まで再度発掘調査を実施し（都合により6月上旬から9月末日まで中断）、今回報告書を刊行する。

発掘調査に先立って、住宅・都市整備公団埼玉地域支社長から文化財保護法第57条第1項の規定に基づく発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは、同法第57条第1項の規定に基づく発掘調査届が提出された。

なお、発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの通知番号は、平成11年4月28日付け教文第2-12号である。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

発掘調査は、平成11年4月1日から11月30日まで行った。

4月 事務手続きを行い、上旬に現場事務所の設置と合わせて表土の掘削を行った。作業は、調査区内に住宅が残っていたことから、それを避けて調査区北半部から始めた。表土掘削終了後、基準点、グリッド杭などの測量を行い、遺構の確認作業を開始した。確認の済んだ遺構は、順次精査を行った。

5月 4月に引き続き遺構精査を行った。溝跡、掘立柱建物群の調査に続いて、後半には井戸跡、火葬墓等の調査を行った。精査の終了したのから写真、実測図等の記録の作成を行った。24日には、調査区南半部の住宅移転の遅れに伴い、調査計画を変更することについて、文化財保護課、住都公団埼玉西部開発事務所、埋文事業団の三者による協議を行った。その結果、6月第2週で発掘調査をひとまず中断すること、残りの調査は10・11月に行うことを確認した。

6月 上旬まで遺構精査、記録類の作成を行った。この後、空中写真撮影、遺構の個別写真撮影を行った。危険個所の埋め戻しを行い、撤収した。

10月 住宅移転後、調査を再開した。上旬に事務所

設置、表土掘削、測量などを行い、中旬から遺構確認、精査を行った。

11月 下旬まで遺構の精査、記録類の作成を行った後、記録図面類の整理、確認を行い危険個所の埋め戻しを行い、調査を終了した。

整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は平成11年12月1日から平成12年3月24日まで実施した。

12月 遺物の洗浄、註記を済ませ接合、復原を行った。接合、復原については遺構毎に行うことを基本とし、各遺構間およびグリッド出土遺物との接合も試みた。接合、復原の済んだものについては実測、拓本の作成を行った。並行して遺構実測図、写真等記録図面類の整理、確認を行った。

1月 継続して遺物の実測作業を行い、実測の済んだものはトレースを行った。遺構図については2次原図の作成を行った。

2月 遺物については、実測図のトレース、写真撮影を行い、遺構図については版下の図版組みを行った。遺構、遺物ともに版下作成後、原稿執筆、割付を行い印刷に入った。

3月 3回の校正の後、報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成11年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事 兼管理部長	広木 卓
<管理部>	
副部長 兼経理課長	関野 栄一
庶務課長	金子 隆
主査	田中 裕二
主任	江田 和美
主任	長滝 美智子
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二
主任	菊池 久
<調査部>	
調査部長	増田 逸朗
調査部副部長	水村 孝行
専門調査員	鈴木 敏昭
主席調査員	杉崎 茂樹
統括調査員	中村 倉司
統括調査員	若松 良一
統括調査員	西井 幸雄
主任調査員	渡辺 清志

(2) 整理事業 (平成11年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事 兼管理部長	広木 卓
<管理部>	
副部長 兼経理課長	関野 栄一
庶務課長	金子 隆
主査	田中 裕二
主任	江田 和美
主任	長滝 美智子
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二
主任	菊池 久
<資料部>	
資料部長	高橋 一夫
専門調査員 兼資料部副部長	石岡 憲雄
専門調査員	市川 修
統括調査員	木戸 春夫

II 遺跡の立地と環境

1 立地

金井遺跡は埼玉県坂戸市大字新堀「字金井」に所在する。「字金井」の範囲は昭和60年度に調査した金井遺跡(A区)及び本調査範囲のB区と調査区域外のB区西側に広がる畑地部分である。また、西端には県指定の天然記念物「ステコビル」の生息する金山神社が存在している。

位置は東武東上線北坂戸駅から西へ約2km、越辺川と高麗川の挟まれた毛呂台地の北東先端にあたる。本地域は東京の都心から北西に約50km離れ、東京のベッドタウンとして位置づけられる。遺跡のすぐ東には東京と新潟を結ぶ関越自動車道が走り、高坂サービスエリアから南西に1.5km、鶴ヶ島I.Cから北西に2.5kmの位置にある。

行政上は、現在坂戸市に属するが、市制施行前は入間郡入西村であり、市町村制の施行以前は入西郡新堀村に属していた。現在の坂戸市の中では市の西部にあたり市街の中心から西に2.5km離れたところにある。

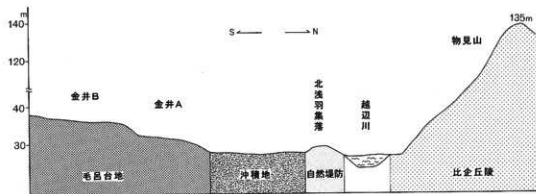
遺跡は、地形的に見ると広大に続く関東平野と秩父山地から東に伸びる毛呂台地との接点にあたり、越辺

川を臨む毛呂台地の北東先端に立地し、台地上から東側の緩斜面にかけて広がりをもつ。標高は台地上で32m、緩斜面との比高差は約3mである。

北側には、この越辺川によって開析された沖積地が広がり肥沃な水田地帯を形成している。南側には高麗川が流路をとり遺跡東側にあたる上吉田の集落付近で越辺川と合流し、その流れは入間川へとそそぐ。この毛呂台地は越辺川と高麗川に挟まれた東西に細長く伸び、南北2.5km、東西5.0kmのやせた台地である。台地内には両河川を始めこの支流である葛川等の中小河川の侵食を受け、起伏に富んだ複雑な地形をしている。越辺川の北側には比企丘陵が眼前に対峙し視界を遮る。また、高麗川の東側には、毛呂台地と対照的な比較的平坦な扇状地地形の坂戸台地が広がる。

毛呂台地と坂戸台地を取り巻く広大な沖積地は、越辺川や高麗川によって形成され、入西条里に代表される肥沃な水田地帯として存在し、原始・古代から中世の入西遺跡群を支えてきた大きな要因と言える。

第1図 地形断面模式図



2 歴史的環境

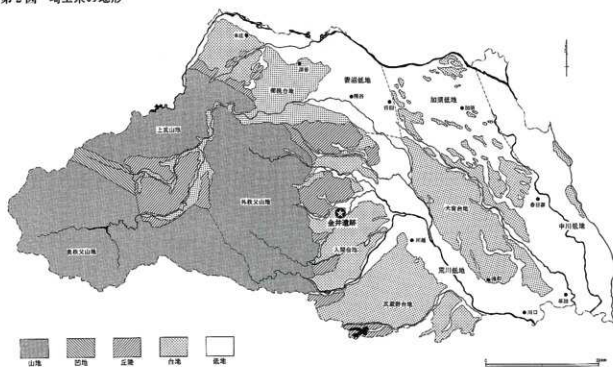
金井遺跡は縄文時代から中・近世にかけての遺構と遺物を検出した。各時代の遺跡や歴史的環境に関しては既に「金井遺跡」（昼間1989）、「広面遺跡」（村田1990）、「塚の越遺跡」（昼間1991）、「稻荷前遺跡A区」（富田1992）、「中耕遺跡」（杉崎1993）の各報告書によって網羅的に詳細が記されている。本稿では金井遺跡B区の銅造時期にあたる中世の様相をまとめてみたい。

金井遺跡を取り巻く周辺の遺跡にはまず、入西遺跡群の中の金井遺跡（A区）、足洗遺跡、桑原遺跡、稻荷前遺跡、塚の越遺跡から中世の遺構を検出している。これら入西遺跡群は越辺川中流域左岸にあたる。金井遺跡A区はB区の北側に位置し一段低い台地上にあり、掘立柱建物跡と井戸跡、溝跡、土壌を検出した。中でも第160号土壌内からは銅鑄型と鉄製の釵を検出した。第14号井戸跡からは在地産の内耳鍋や片口跡、土釜を出土し室町時代前半から後半の板碑を検出した。「足洗遺跡」（馬橋1994）によれば、中世の遺構を出土遺物15～16世紀とし区画溝の変遷によって第1～4期までとしている。1期を15世紀代、3期を16世紀代として

いるが、足洗遺跡からは銅造滓や鍛冶羽口、挽形滓を検出。金井遺跡B区の銅造時期と同じくする時期を想定したい。このように、B区北側と東側の一段低いローム台地上には銅造場とはことなるもの居住もしくは付属作業場として存在していたものと考えられる。

金井遺跡B区の西側には南東向きに金山神社が存在する。遺跡群の西側に目を転じると桑原遺跡・稻荷前遺跡・塚の越遺跡が存在し、桑原遺跡からは掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡を検出した。「桑原遺跡」（村田1992）によれば出土遺物からⅢ-1～3期に変遷すると考えⅢ-1期を14世紀後半～15世紀後半、Ⅲ-2期を16世紀前半、Ⅲ-3期を17世紀としている。稻荷前遺跡からは掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、火葬墓を検出した。「稻荷前遺跡A区」（富田1992）によれば出土遺物から13世紀の青磁が最も古く、次いで14・15世紀代の瀬戸美濃系陶磁器、15世紀以降の在地産軟質陶器が認められるとし、量的には15世紀代の遺物が「多い」としている。塚の越遺跡からは井戸跡、溝跡、火葬墓、土壌を検出した。「塚の越遺跡」（昼間1991）によれば火葬墓内から青銅製の

第2図 埼玉県の地形



五銚杵を検出した。また、遺跡内から青銅製の神像を検出し、いずれも室町時代と見られる。第9号溝からは高台の付く常滑産の片口鉢、青磁碗、さらに、土釜や在地産の片口鉢を検出しており13世紀後半から15世紀代の遺跡と考えられる。これらの遺跡群の北側には入西耕地（入西条里）が広がる。

このように、入西遺跡群は中世13世紀から15世紀、そして、16・17世紀に至るまでの足跡が見られるが、中でも金井遺跡B区で鑄造生産を行っていた13世紀後半～14世紀前半と集落として存在する14世紀後半～15世紀代が遺跡の中心時代と見られる。

入西遺跡群の所在する入西郡は武蔵七党の一つ見玉党の祖、見玉有太夫弘行の所領であった。弘行の本領は見玉郡にあり、長子家行は見玉一族の本流として見玉郡を中心とし上野国にも所領が及んだ。三男資行は父祖伝来の地、越辺川流域の入西郡を分け与えられ入西氏を名乗った。資行の居館がどこであったかは伝承もなく不明であるが、11世紀も終わりに近い頃と考えられている。（『坂戸市史』通史編1）。

入西資行の嫡流は浅羽氏を、二男は小代氏、三男は越生氏となり領地を分割譲渡していく。やがて、浅羽氏は小見野・栗生田・大河原・長岡・堀込氏と分割し、小代氏は高坂・吉田氏、越生氏は成瀬・黒岩・岡崎と分割する。入西遺跡群の確認された13～14世紀にはほぼこうした所領分割の行われた時代と見られる。

遺跡南側に広がる毛呂台地上には、まず、入西耕地をほぼ一望できる位置に三福寺が存在する。本寺は浄土宗寺院で開創の時期は不明であるが、『新編武蔵風土記稿』には「薬師堂ニテ一寺ニハアラス」と記載されている。江戸時代の平田家文書の研究によると『小山村名寄取帳』には「薬師堂作」の記録がみえ三福寺の前身が薬師堂であったことがわかる。本尊の薬師如来座像は鎌倉時代初期の慶派の仏師によって造られ、椀の寄木造りにより漆落がほどこされている。また、境内からは古瀬戸の四耳壺・瓶子と常滑の大甕が出土しておりこれらは13～14世紀に比定されている。さらに、同寺の墓地从ら永仁・元応・元享などの鎌倉時代の板碑をはじめ75基以上の板碑を出土している。

第3図 金井遺跡A・B区と足洗遺跡



第4図 周辺遺跡分布図



- 1 金井遺跡B区 2 金井遺跡A区 3 足洗遺跡 4 桑原遺跡 5 稲荷前遺跡 6 泉の池遺跡 7 堂山下遺跡 8 代正寺遺跡 9 宿ヶ谷戸遺跡
 10 三福寺 11 大瀬氏館 12 毛呂氏館 13 大塚屋敷 14 大河原氏屋敷 15 新堀陣屋 16 善能寺 17 長岡氏館 18 槌込氏館 19 越生氏館
 20 黒岩氏館 21 児玉雲太夫館 22 御形跡 23 大塚遺跡 24 菅谷跡跡 25 河原越氏館 26 勝呂氏館 27 別野屋敷 28 栗生田氏館 29 小代氏館
 30 高坂陣屋館 31 足利基氏氏館 32 野本氏館 33 比企能武館 34 漢彌寺 35 大法寺 36 大福寺 37 崇徳寺 38 深渡裏屋 39 円正寺 40 向徳寺
 41 正法寺 42 平次寺 43 田波目城 44 萱方城 45 青島城 46 松山城 47 熊井城 48 小倉城 49 越前城 50 苔林野古戦場 51 雷火跡

〔『坂戸市史』中世資料編II〕また、本寺の東側の小宇東山からは密教法具を出土し、浅羽氏と薬師堂の関係が注目される。

この他、三福寺の東側には大法寺が存在し、寺域の北西には鈎の手状の土塁が残る。金井遺跡の南側には大福寺が存在しこれら3か寺が金井遺跡と同一台地上に近接する寺院である。金井遺跡の西側には「カンノンミチ」と呼ばれた南北に伸びる街道が存在し、この道は東松山の正法寺へ通じる道から由来しているようだ。この道を挟んだ台地先端部に堀込氏館跡と推定される場所が存在する。堀込氏は浅羽氏から分家した一族であり、三福寺と同様に入西耕地を臨む位置に所在している。

入西耕地を隔てた自然堤防上の微高地には北浅羽の地名が残りにここに満福寺が存在する。本寺は浅羽氏の菩提寺と伝えられ徳治二年（1307年）造立の浅羽行成供養板碑が現存している。

このように越辺川の右岸に広がる経済的基盤である入西耕地を中心として、周囲の丘陵先端部には、館や寺が造られ開発領主的景観をもっている。しかし、鑄造遺跡としての金井遺跡の存在意義が単に浅羽氏や周辺寺院に供給するためだけに存在したのか解明すべき問題と言える。

入西遺跡群から目を外に比べると遺跡群の西1キロ程の所には鎌倉街道上道が往還し、河川交通路であったと考えられる越辺川と交差する右岸には、苦林の宿が存在する。堂山下遺跡（宮瀧1991）はこの宿跡の可

能性が想定されており、しかも、この一帯は苦林野と呼ばれ貞治2年（1363年）には室町幕府鎌倉公方足利基氏と越後国守護芳賀禪可の軍勢が激突した苦林野合戦場として有名である。すぐ西には中世寺院で知られる崇徳寺跡が存在し、調査の結果、寺域は東西50m、南北65mで、中心部分は22×22の方形に1mの堀をもち、周囲に低い土居を巡らす。遺構は東墓・中墓・西墓を検出し、出土遺物には古瀬戸瓶子、常滑壺・甕、在地甕がある。崇徳寺の年代は陶磁器から13世紀後半から14世紀初頭と位置付けられ、検出された板碑の造立年号は1310年から1382年の期間であり14世紀初頭には崇徳寺が造立されていたものと考えられている（梅沢1991）。

越辺川左岸には、円正寺が存在し、寺域内の畑から金刺重弘作の応安4年（1371年）銘の雲版を出土した。鎌倉街道を北に進むと笛吹峠を越え嵐山町の大蔵館に至りこの地の向徳寺には宝治3年（1249年）武州小代で製作された阿彌陀三尊像が納められている。越辺川下流には入間台地の先端に村山党の山口氏の子孫山口家俊の子家恒が平安時代末に石井の地に館を構え勝氏と称した。

金井遺跡B区を取り巻く周辺の歴史的環境は鎌倉街道上道と河川交通路越辺川の交差路に当たり、越辺川流域を治めた鎌倉御家人入西氏（後に浅羽氏）の所領であった。また、中世館とともに多くの寺院が残されている。入西遺跡群の理解とともに地域の歴史的環境が明らかになってきた。

3 入西遺跡群の概観

開発面積119万㎡の内、遺跡として確認されたのは12遺跡延べ39万㎡である。占地の違いから遺跡の立地する環境は大きく異なる。つまり、開発地の南西部、毛呂台地の北側斜面に位置する塚の越遺跡は標高35m、沖積地との比高差6mである。同様に南東部に位置する金井遺跡B区、足洗遺跡も毛呂台地上に位置する。これに対し、他の8遺跡は埋没ロームを主体とする標高27～30mの沖積微高地に占地しており、高麗川、越辺川による冠水の影響が認められる。

[金井遺跡B区] 毛呂台地の北東端に位置し、調査面積は20,000㎡で、標高31m、沖積地との比高差は3mである。検出された遺構は、7世紀～9世紀にかけての住居跡30軒、掘立柱建物跡13棟の他、13世紀～14世紀の鋳造関連遺構は、溶解炉2基、鋳造遺構群15ヶ所、掘立柱建物跡13棟、井戸跡14井、粘土採掘坑3ヶ所、土壇273基、溝跡53条の他、集石土壇2基、火葬墓16基が調査された。特に、中世の鋳造遺構の検出は当該期の鋳物師集団の生産活動の実態を知る資料として、関東地方では初めての調査例である。遺物は台地上面と、二段にわたって形成された斜面及び平場から鋳造関連遺構を中心におびただしい鉄滓、銅滓が認められ、鍛冶炉から鍛造剥片、溶解炉周囲の土壇から梵鐘の鋳型片(龍頭、乳、笠型、帯、駒の爪、撞座)を多量に出土した。また、仏像鋳型、仏具鋳型、獸脚鋳型、鍋の鋳型、唐草紋様をもつ蓋状の鋳型など豊富な種類が確認された。(平成元年度調査)

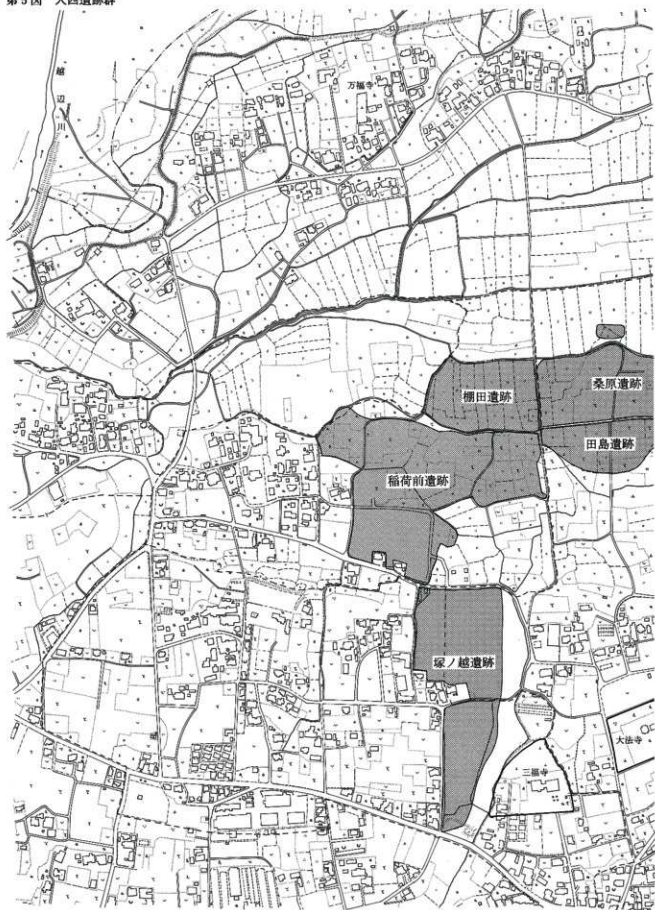
[金井遺跡A区] 毛呂台地北東端の斜面の一部と沖積微高地に位置し、調査面積は33,000㎡で、標高27mである。調査区は東西方向に2本の小支谷が入り島状の景観をなしている。検出された遺構は住居跡73軒(古墳時代後期44軒、奈良時代13軒、平安時代16軒)、土壇700基(古墳時代後期～中世)、井戸跡16井(古墳時代後期～平安時代)、溝跡50条、掘立柱建物跡9棟、ピット多数が調査された。集落は古墳時代が北側の谷を挟んで東西に、奈良時代に北と南の谷の間に、平安時代は西側にそれぞれ時代毎に変遷がみられる。中世間

係は土壇のなかから鋳造関係に使用されたと考えられるものが含まれており、鉄鍋の鋳型片を検出した。これらは、北側に隣接する金井遺跡B区同様、中世鋳物師集団の生産跡と考えられ、調査区外の部分を含めた関連領域はかなり大規模なものとなることが想定できる。(昭和60年度調査 事業団報告第86集)

[足洗遺跡] 狭小な島状の台地に占地し、調査面積は16,500㎡である。7世紀後半～9世紀を中心とする集落遺跡で北側に開口部をもつ馬蹄形を呈する。検出した遺構は住居跡40軒、掘立柱建物跡29棟、井戸跡18井、土壇193基で、内縄文時代後期の住居跡1軒が含まれる。住居跡は台地中央部に集中して多くの新旧関係をもち、掘立柱建物跡は南西と北東に集中するが、主軸方位は群間で異なる。(平成元年度調査 事業団報告第136集)

[稲荷前遺跡A・B・C区] 毛呂台地の北側に広がる沖積微高地に位置し調査面積は48,000㎡で、東に田島遺跡、北東に桑原遺跡、北に棚田遺跡、南に塚の越遺跡がそれぞれ隣接している。調査区は東西に走る谷地により南北に分割され、更に北側は北から入る谷地により東西に分割されることから3ヶ所の調査区となり、南から時計回りにA・B・Cと呼称している。検出された遺構は入西遺跡群中最も遺構の分布密度が高いA地区からは奈良・平安時代の住居跡136軒、土壇295基、井戸跡47井、溝跡39条、掘立柱建物跡31棟、特殊遺構6基が調査され、B地区からは古墳時代前期の方形周溝墓17基、古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡85軒、土壇62基、井戸跡14井、溝跡9条、掘立柱建物跡6棟、特殊遺構1基が、C地区からは古墳時代前期の方形周溝墓19基、古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡94軒、土壇137基、井戸跡30井、溝跡30条、掘立柱建物跡11棟、特殊遺構4基が調査されている。特に、方形周溝墓は北縁に東西に分布しており、桑原A遺跡、広面B遺跡、中耕遺跡に至る一大墓域群を形成している。8・9世紀の遺構からは鳩山窯跡産の須恵器が多量に出土され、円面碗、獸脚付短頸壺、鉄鉢

第5図 入西遺跡群





形跡などの特異な器種がみられる他、「内」の印刻をもつ資料、意味不明の墨書「□尺本」、「大里郡」、「多摩郡男川」等律令期の武蔵国に実在した郡名が複数読み取れる8世紀中頃の黒書土器が出土している。中世の集落跡を検出した。出土遺物から13世紀～16世紀と推定され建物跡、井戸跡、溝跡を確認した。(昭和61～63年度 調査A地区に関しては事業団報告第120集)

[塚の越遺跡] 毛呂台地の北東部に位置し、調査面積は35,000㎡で、標高35m、沖積地との比高差は5～8mである。検出された遺構は、住居跡82軒(縄文時代中期2軒、弥生時代中期2軒、6世紀末～8世紀代78軒)、前方後円墳1基(6世紀前方部調査)、掘立柱建物跡9棟(奈良・平安時代)、土壇24基(中世)、井戸跡247井(奈良時代～中世)溝跡78条(奈良時代～中世)、火葬跡1基である。住居跡は4.5m×5.0m前後の比較的小型のものが多く、古墳時代後期のものには屋外への排水溝をもつ住居跡が存在する。掘立柱建物跡には1m余りの掘り方をもつ3棟が含まれ、総じて3間×2間の母屋を基本とする。廂持ちの建物も2棟検出された。溝跡は区画性が高く、井戸跡及び検出されていない建物群との組み合わせが想定される。前方部のみ調査された前方後円墳の周溝からは、ほぼその全容が知られる正装男子人物埴輪、盾持人物埴輪の他、女子人物埴輪、馬形埴輪の鞍橋部分、そして12個体分の円筒埴輪が出土している。中世関係は、建物跡・溝跡・土壇を検出し火葬墓から青銅製5針片が、青銅製神像が遺構外から出土している。(昭和61年度調査事業団報告第101集)

[桑原A遺跡] 調査面積は30,000㎡で、住居跡102軒、掘立柱建物跡21棟、土壇42基、井戸跡20井、溝跡25条、方形周溝墓2基(事業団報告第89集 広面遺跡に収録)である。遺跡の立地する低位台地は南から北に開析する谷地により東西に二分されており、遺構分布も様相を異にしている。東側部分は方形周溝墓2基以外に遺構の検出はない。これらの方形周溝墓は本来、北東に隣接する広面B遺跡の方形周溝墓群に包括されるもので、両遺跡を隔てる浅い谷地を超えて古墳時代

前期の墓域が西に拡大した結果とみる事ができる。これに対し、西側部分は6世紀中葉を初現とする集落が以後最低半世紀程の間に建て替えをくり返し、安定した集落構成がみられる。集落は越辺川の侵食作用で生じた台地縁辺の崖線を北限とし東西は浅い谷地により画され、南限は集落の初現段階に設けられた幅2mの規模を有する23号溝跡により画される。内部は南北にそれぞれ30軒前後の住居跡の集中がみられ、その間に23号溝跡と並行するかたちで15号溝跡が配されている。15号溝跡は該期の住居跡との新旧関係を有する他、石製模造品が複数検出されており、集落内における重要な位置を担っていたものと考えられる。中世関係は14・15世紀に居住した痕跡が認められ「く」の字状の溝・井戸・土壇・建物跡を検出した。(昭和63年度調査 事業団報告第121集)

[桑原B遺跡] 桑原A遺跡の北に広がる沖積地。プラント・オパール調査の成果を基に水田跡の確認調査を実施した。その結果、大坪の一部を検出したが、自然流路からの引込み溝、或いは畦畔の単位・形状を明確にするには至っていない。周囲から7世紀の須臾器(坏・壺)が出土している。調査面積は2,000㎡。(昭和62年度調査 事業団報告第121集)

[広面A遺跡] 広面B遺跡の南に位置し、調査面積は10,500㎡で東西30m、南北40m程の標高28mの沖積微高地である。当初、塚群の存在を想定した領域であるが、検出された遺構は溝跡2条、土壇14基、井戸跡で所産時期は出土した土鍋、カワラケ、陶磁器類から概ね中世と考えられる。(昭和60年度調査 事業団報告第89集)

[広面B遺跡] 調査面積は9,500㎡で、東西60m、南北90m程の沖積微高地に位置し、遺構は方形周溝墓20基が主たる遺構で生活した痕跡を残さない純粋な墓域としての領域である小規模な谷地を挟んで北東には中耕遺跡、南西には桑原A遺跡に方形周溝墓群が直線的に連なり4世紀代の一大墓域群を形成している。墓域の中央に位置する通称柵塚(SZ09)は、溝を含めた規模が東西52m×42mにもおよび、当該地域の発生前

古墳と比較しても遜色のない規模といえる。また、2 m程の盛り土が遺存し、南東及び北東に長さ3 m程の張り出し部が確認されたことに加え、南西には斜位に掘り残した陸橋を設けるなど方形周溝墓としては珍例に属する。柙塚の周囲を取り巻く周溝墓は溝の形態により、四隅を残すタイプ、一周するタイプ、方台部中央が切れるタイプ、隅の一部が切れるタイプなど多彩である。出土遺物は壺、小型壺、埴、器台、台付甕など全て土器で、甕類を除く器種には赤彩を施す例が多い。(昭和62・63年度調査 事業団報告第89集)

[中耕遺跡]沖積微高地に位置し、調査面積は35,000 m²である。方形周溝墓68基(弥生時代終末期～古墳時代初頭)、住居跡86軒、(縄文早期～中期10軒、弥生時代終末～古墳時代初頭の集落76軒)が調査されている。方形周溝墓は、方台部の一辺が10mを越える大型のものから一辺4 mに満たないものまで規模に大きな幅をもつ。大型の周溝墓の内3基に1 m程の盛り土が遺存する。平面形は周溝が全周するもの、四隅の切れるもの、一辺の中央が切れるもの、隅の一部が切れるものが存在する。周溝墓は集落が廃絶されて間もなく構築された。出土遺物は周溝から東海系、吉ヶ谷系などを含む底部穿孔の壺、甕、埴、器台、高環などの土器類の他、一木造り二又鋤などの木製品が、住居跡は方形プランが一般的で、中央に炉跡を設ける。大半が火災にあっている。遺物は日常の煮沸具、供膳具の他異彩土器の出土も多数認められる。(平成元・2年度調査 事業団報告第125集)

[田島遺跡]毛呂台地の北東に連なる低台地(標高29m)に位置し、調査面積は27,000m²で、西に稲荷前遺跡、北東に棚田遺跡、北には桑原遺跡が隣接する。検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡6軒、掘立柱建物跡7棟、土壇7基、溝跡9条、井戸跡9井、ピット89基である。掘立柱建物跡は掘り方が小規模であることから中世以降の所産と考えられる。調査区の北を東西に画する第1号溝跡からは6世紀前半の土器が多量に検出された。本来、第1号溝跡は6世紀前半に形成された桑原遺跡の南限を意図した溝である。集落については、稲荷前遺跡に帰属する内容と思われる。(昭和63年度調査)

[棚田遺跡]毛呂台地の北に広がる沖積微高地に位置し、調査面積は33,000m²で、標高28.5mである。検出された遺構は住居跡28軒(6世紀前半)、溝跡2条、畦状遺構1ヶ所、歴史時代の井戸跡5井、土壇7基である。住居跡は3～6軒を一単位のまとまりとして6ヶ所程が確認された。出土土器から桑原遺跡に若干先行する段階と考えられ、当該地域におけるカマド導入後間もない時期に位置付けられる。南限を画する溝は東に向かい、桑原遺跡(24号溝跡)、田島遺跡(1号溝跡)を経由して更に東方に延びる。時期は田島遺跡の一括資料から6世紀前半と考えられる。(昭和63年度調査)

II章は「金井遺跡B区」(赤熊1994)より一部改変して転載した。

III 遺跡の概観

金井遺跡B区は東西120m、南北180m、調査面積20000㎡におよぶ中世の大鑄造遺跡である。遺跡は小字名の金井にあたりその中でも東側に位置し、北側は既に金井遺跡(A区)として調査・報告されている。本遺跡の西側部分の畑地も字金井に含まれることから遺跡範囲が広がるものと考えられ、西端には古社金山神社が祀られ字金井の地にふさわしい景観をしている。遺跡は毛呂台地北東先端にあたり、入西条里の施行されたと思われる沖積地が一望できる位置にある。

古代の遺構は竪穴住居跡30軒、孤立柱建物跡13棟、土壘を検出した。古代の集落は台地上及び緩斜面部、そして、一段低い低台地上にも検出した。さらに隣接する足洗遺跡や金井遺跡A区にも存在する。集落の開始時期は本遺跡とA区が7世紀前半であるのに対し足洗遺跡は5世紀末～6世紀初頭の時期に集落が造られ、一度途切れた後、7世紀前半から再び集落が始まる。いずれの遺跡も終焉は9世紀末にはこの台地上から姿を消す。

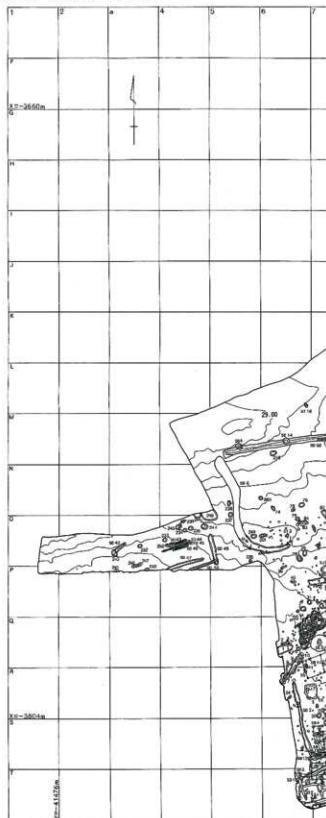
出土遺物は集落開始時期に比企型環と口縁部に段をもつ模倣環を共伴させ長胴甕を伴う。7世紀後半には退化形態の比企型環と北武蔵型環を共伴させ、8世紀、南比企窯跡の成立と共に須恵器製品の供給が多くなり、これまで、土師器に依存していた供養具は須恵器に変化する。9世紀後半は灰輪陶器を出土する。

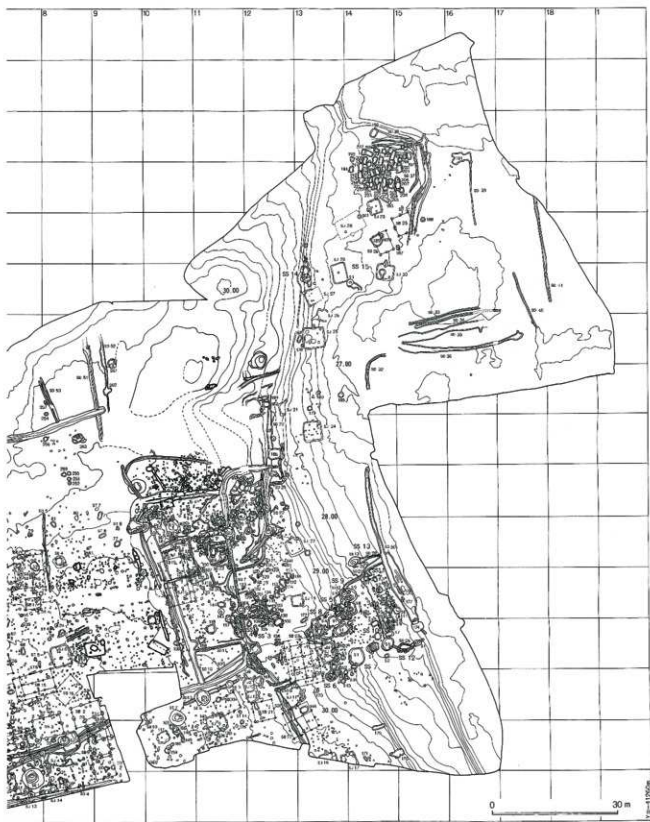
中世の遺構は調査区全体に分布する。検出された主な遺構は、浴解炉²2基、鑄造遺構群(SS)15箇所、孤立柱建物跡(SB)13棟、井戸跡14基、溝跡53条、土壘273基、粘土探掘跡3箇所、炭焼き窯1基などである。今回は鑄造遺構は台地上の平坦部分から東側の二段からなる緩やかな斜面部に大規模に検出された。

遺構が広範囲にわたるため調査区を第1～7区に分割し各区毎の遺構と遺物について鑄造跡、孤立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土壘、火葬墓の順で報告する。

第1区には第1鑄造遺構群を含む台地中央部分、第2区は第2～4鑄造遺構群を含む台地東側の縁辺部分、

第6図 金井遺跡B区全体図





第3区は第5～13鑄造遺構群を含む東側緩斜面、第4区は第14・15鑄造遺構群が含む台地北東端の東側緩斜面部、第5区は北東端の低台地部分、第6・7区は台地の北端部分である。

第1区は台地平坦部にあたり調査区の中でも標高31.0mと高い位置に当たる。本区からは第1鑄造遺構群(SS01)を検出した。不整形の南北に長い鑄造土域内からは鍋鑄型、容器鑄型、羽釜鑄型を出土し、鑄物道具は三又状土製品、半球状土製品を出土。また、遺構埋土中からは青磁碗を検出した。第1鑄造遺構群の南西には方形の第1号土壌からは砂質土を覆土にもつ。また、北側第4号土壌からは焼土とともに多量の滓を検出した。これら生産遺構の南側には直径4.00m、深4.50mの井戸跡を確認。さらに南側には2×3間、3×4間の建物跡を検出した。

第2区は未調査区を挟んで東側の台地上に展開する地区である。本区の特徴は鑄造作業に必要な粘土の採集遺構が存在し、小規模の土壌を多く検出したことにある。検出された遺構は第2・3・4鑄造遺構群と第1～3号粘土採掘跡を確認し、また、鍛冶炉を伴う第85号土壌(竪穴状遺構)、第1号炭焼き窯跡と鑄造の作業のためと考えられる土壌群である。本区の中心的な鑄造遺構である第2鑄造遺構群(SS02)からは第1鑄造遺構群からも出土した容器状鑄型を検出した。東側には第22号溝跡が南北に走り覆土中からは中世陶磁器とともに鑄造遺物を多量に出土した。また南側には大型の第19号孤立柱建物跡を検出。

第3区は調査区の東側に形成された二段からなる緩斜面を中心とした地区でこの斜面部分を利用した鑄造遺構群を検出した。確認した鑄造遺構群は第5～13遺構群で、斜面部は多量の鑄造遺物を含む厚い堆積層で覆われていた。第5鑄造遺構群からは第1・2号溶解炉と、炉の南側からは多量の梵鐘鑄型を出土した第1～10号鑄造土壌を検出した。第10鑄造遺構群からは梵鐘鑄造土壌を検出し、このうち、第1号鑄造土壌は底面に掛け痕が見られ、第7号鑄造土壌内からは梵鐘鑄型をまとめて出土した。第5・7・8・10遺構群は梵鐘

鑄造に関わる跡と考えられる。一方、第6鑄造遺構群からは大型の獸脚鑄型を出土。第11鑄造遺構群からは仏像・髻・注ぎ口・飾り金具等の仏具鑄型を出土し、鑄造生産の様相が異なる。注目すべき遺構として本群からは輪座の跡を検出した。第9・13は滓や炉壁片を中心として出土し遺構は検出されず廃滓場と考えられる。

第4区は調査区北側にあたり第3区からの緩斜面が続き、この斜面部分に第14鑄造遺構群が存在し、容器鑄型の据えられた鑄込み跡とが跡を検出した。その東側には廃滓場を主体とした第15鑄造遺構群が存在する。

第5区は北側の低台地に検出された土壌集群と溝跡である。第6・7区は調査区北西にあたり台地の北西端である。井戸跡、土壌、溝跡を検出したが、第7区第50号溝は第1区第4号溝と対する断面「V」字型の深い堀である。

出土遺物は鑄型・鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、羽口等の鑄造遺物と生産道具・陶磁器・木製品などである。これらは各遺構や斜面に形成された堆積層中から出土した。

鑄型は日常用品と仏具用品とに大別できる。日常用品としては、第1鑄造遺構から検出した口径27cm、底径22cmの鍋鑄型やコップ状容器鑄型、口縁部に段をもつ羽釜と見られる鑄型や大釜の胴とえられるドーナツ状の鑄型、そして牽鑄型を検出した。仏具用品の鑄型は斜面部に形成された第5～15鑄造遺構群から検出され、梵鐘、小仏像、獸脚、火舎などの容器、髻、釘の目隠しに使われたと考えられる飾り金具、蓋や吊り灯籠などのつまみ、水差しの注ぎ口等の鑄型を検出した。

道具は鑄型成形に使う鉄製のハタマワシをはじめとするへら状工具を検出。また、三又状土製品や半球状土製品、砥石を検出した。金井遺跡A区からは鍋鑄型とともに鉄製の箍を検出している。陶磁器は青磁・白磁をはじめ渥美・常滑・瀬戸窯の製品を検出した。在地産では内耳鍋や甕、土師瓦皿、片口鉢を検出した。木製品は曲物、椀、きぬた、オシキ等でその多くが井戸跡からの検出である。

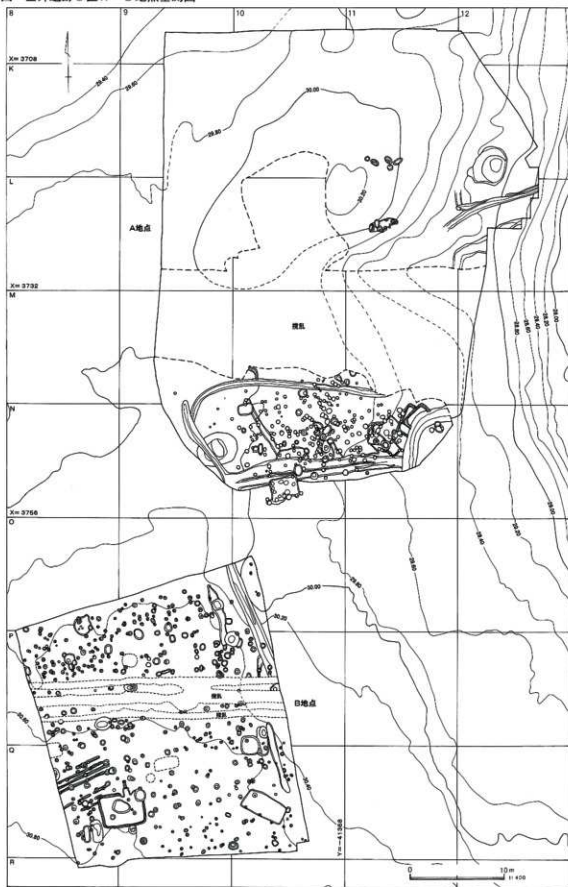
中世の遺構・遺物における遺跡の年代観については大きく2時期あることが明らかになった。つまり鑄造を主体とした時期と建物跡・井戸跡を含む集落としての時期である。鑄造の時期は陶磁器から見る1鑄造遺構群から検出された凌ぎ蓮弁の龍泉窯系の青磁碗や画花文の銅安窯系の青磁碗、白磁皿の出土していること。そして、常滑の甕に13世紀中葉から後半の資料があること、また、瀬戸の四耳壺や渥美の甕が13世紀の前半に位置づくことである。鑄型から見ると梵鐘撞座が13世紀後半から14世紀前半の文様であること。集落の時期は多くの井戸跡から検出された常滑、瀬戸・美濃をはじめ在地産の片口鉢、内耳鍋等の遺物から14世紀中葉

から15世紀と考えられる。

中世の鑄造遺跡は長野県寺平遺跡、京都府京都大学構内遺跡、大阪府真福寺遺跡、福岡県大宰府鉾の浦遺跡とともに関東において代表的な遺跡である。金井遺跡での鑄物師の活動を記した文献資料や伝承は伝えられていないが、ただ金山神社のみがその存在を今に伝えてきた。ここに金井遺跡の様相が初めて明らかとされる。

III章は「金井遺跡B区」(赤熊1994)より一部改変して転載した。

第7图 金井遺跡B区A・B地点全測図



IV 遺構と遺物

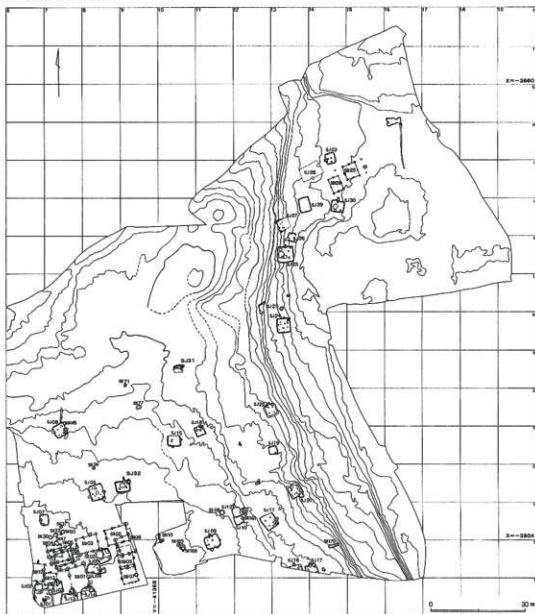
1 古代

今回検出された古代の遺構は竪穴住居跡3軒である。内訳はA地点で1軒、B地点で2軒である。分布の傾向は前回の調査と同じく、台地上に他の住居跡と一定の距離を置いて存在する。また、A地点北側の標高の高

い部分には遺構は分布しない。

出土遺物は、第32号住居跡からわずかに出土した他は、極めて少量であった。

第8図 古代の遺構全体図



(1) 住居跡

第15号住居跡 (第9図)

P-10グリッドに位置する。前回の調査では、東側の竈部分が調査されている。今回その西側を検出した。重複する遺構は、第10・12・14号溝跡でいずれも本住居跡より新しい。また、南西は攪乱によって壊されており、住居跡は殆ど原形を留めていない。前回調査した東壁の竈部分と今回検出の西壁の北半分だけである。壁溝と思われる掘り込みによって北西隅と西辺の一部を検出した。これによって住居跡全体の規模が確定された。長軸は推定4.25m、短軸は推定4.13m、主軸方位はN-81°-Eとなった。深さは前回竈側で9cmであったが、西側は6~9cmである。床面等は重複によってはっきりしない。溝跡の底面から新たにいくつかのピットが検出されたが、主柱穴と判断されるものはなく、その時期も不明である。

遺物は、出土しなかった。

時期は不明である。

第31号住居跡 (第10図)

N-10グリッドに位置する。第54・55号溝跡によって南側を壊されている。また、第58号溝跡が住居跡上

面を北西から南東方向に通っている。よって、検出されたのは北半分である。長軸3.55m、短軸は推定2.70m、主軸方位はN-81°-Eである。深さは2~5cmである。竈は検出されなかった。おそらく南壁或いは東壁の南側に設置されていたものと考えられる。壁溝も検出されなかった。床面はほぼ平坦である。ピットが複数検出されたが殆どは本住居跡より新しく、中世の掘立柱建物跡に伴うものである。

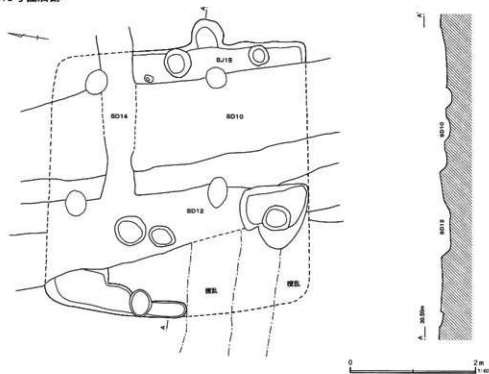
遺物は、出土しなかった。

時期は不明である。

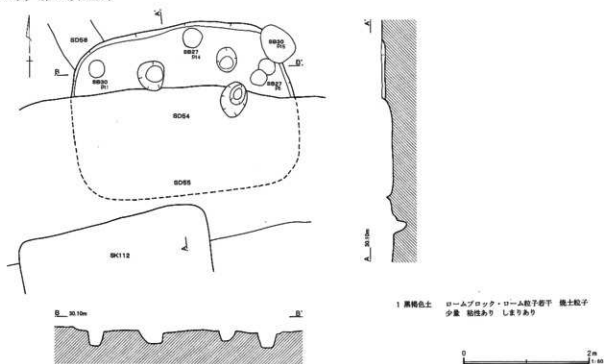
第32号住居跡 (第12図)

Q-8・9グリッドに位置する。第17号井戸跡により東隅を壊される。住居跡内には、中世の第31号掘立柱建物跡の柱穴が掘り込まれていた。規模は、長軸4.80m、短軸3.55mで、深さは24~35cmである。主軸方位はN-81°-Eである。床面はほぼ平坦で、中央部に床下土壌が検出された。土壌は長径1.83m、短径1.25m、深さ5~10cmの楕円形を呈する。ロームブロックを主体とする暗黄褐色土の貼床の下は、黒色土を主体とする暗黒褐色土であった。壁溝は竈右側を除いて全周している。壁溝幅15~35cm、床面からの深さ3~11

第9図 第15号住居跡



第10図 第31号住居跡

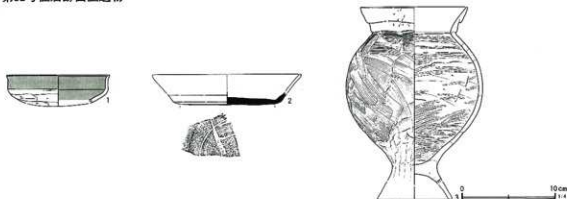


cmである。柱穴は竈の前方に2基検出されたが主柱穴は不明である。貯蔵穴は検出されなかった。第17号井戸により壊された可能性もある。竈は北壁東寄りに検出された。燃烧部長さ0.9m、幅0.75m、煙道長さ0.83mである。袖の長さは50cmである。住居跡床面と竈底面の差は6cmであり、わずかに掘り窪めているようである。竈底面と煙道とは21cmの段差を有する。煙道先端のピットは、土層断面から、住居跡より新しい時期のものと判断される。

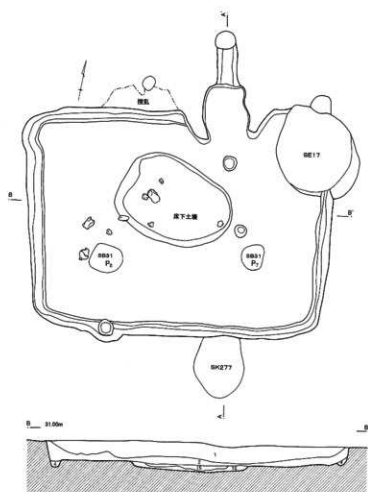
遺物は、殆どが小破片で、須恵器片3点、土師器環・甕片22点、中世陶器片2点と少量であり、時期もばらつきがある。第11図1は比企型環である。内面と口縁

部外面は赤彩される。口唇部内面に沈線を有する。約10%の残存で、推定口径は11cmである。2は須恵器環、底部の約20%の残存である。推定底径10cmである。中央が厚く、周辺部は薄くなる。底部外面は回転斲削りされる。白色針状物質を含む。鳩山産である。3は土師器台付甕である。口縁部は約10%、胴部は60%の残存で、台部下半を欠失する。推定口径11.4cm、同器高20.4cmである。口縁部は粘土紐で外面に段を残し、調整は横撫でされる。同部外面は下半まで木口状の工具により、下部は斲削りされる。内面は、特に下半に磨き状の細かい撫でが施される。

第11図 第32号住居跡出土遺物

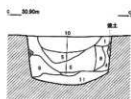
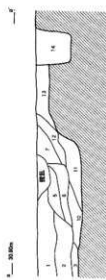
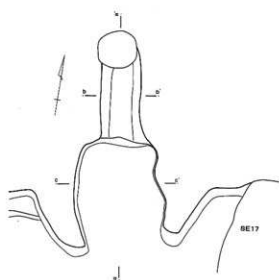


第12図 第32号住居跡



- 1 黒褐色土 褐色土ブロック 焼土跡
・炭化物粒少量
- 2 黒色土 焼土粒子 炭化物粒子
別位置
- 3 黒色土 2層に近接 焼土ブロック
- 4 暗褐色土 堆山の褐色土をブロック状に
多量含む
- 5 黒褐色土 (天井部) ローム質土中に
焼土ブロック少量混入
- 6 黒褐色土 (天井部) 6層よりローム質土
多量
- 7 黒褐色土 (天井部) 6層よりローム質土
少量 焼土多量
- 8 暗褐色土 1層に近接 黒色土主体
焼土跡少量
- 9 黒褐色土 6層に近接 ローム質土主体
焼土跡少量
- 10 黒褐色土 (天井部の焼土化したもの)
焼土多量
- 11 赤褐色土 (傾斜部に天井が崩落したもの)
- 12 赤褐色土 (傾斜部に天井が崩落したもの)
- 13 暗褐色土 傾斜部の焼土多量混入
焼土ブロック少量
- 14 黒褐色土 黒色土・ローム質土混在
- 15 暗褐色土 (陥没) ローム質土を
ブロック状に混入
- 16 暗褐色土 黒色土主体

0 2 m 1:100



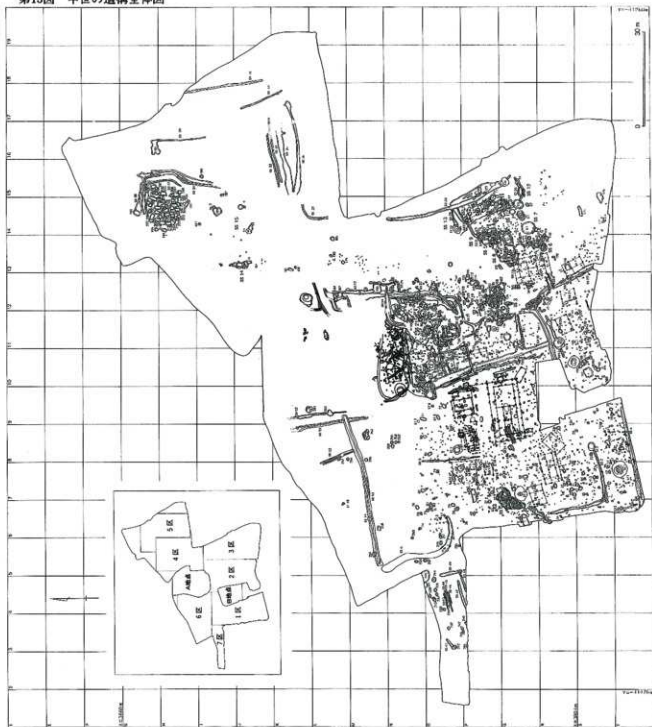
0 1 m 1:100

2 中世

今回の調査では北側の調査区をA地点、南側の調査区をB地点とした。A地点は中央部の道路予定地部分が大きく掘削され破壊されていたために北側の遺構の広がりがわかり難くなっていた。全体的には前回の調査と同様に、北側は遺構の分布が希薄で南側に集中している。鋳造関連の遺構、掘立柱建物跡、井戸跡、火

葬墓等を検出したが、今回注目されるのはB地点で、村落の中心とも考えられる大形の掘立柱建物跡が検出されたことである。調査前の予想では鋳造関連の土質などの存在が予想されたが、それらはB地点では殆ど検出されなかった。遺物は全体に少ないが、青磁碗、常滑産の甕、滓、鋳型破片等が出土した。

第13図 中世の遺構全体図



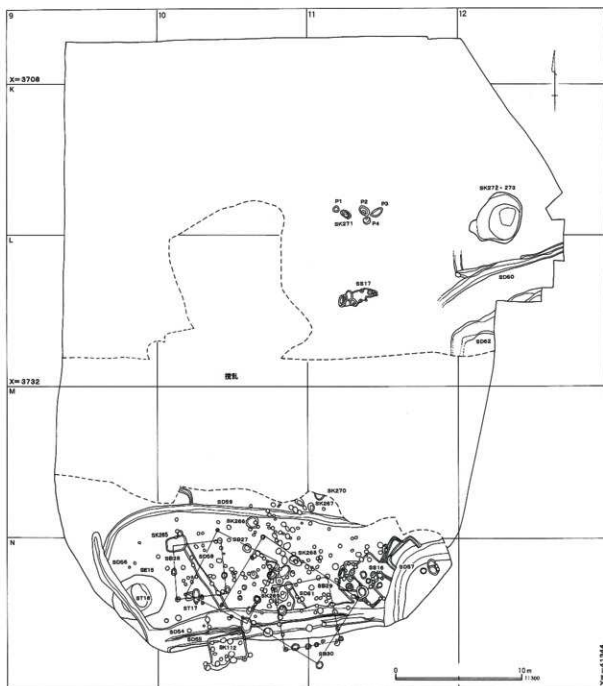
(1) A地点

A地点で検出された遺構は、鋳造関連遺構2箇所、掘立柱建物跡4棟、井戸跡1基、火葬墓2基、溝跡9条、土壌9基である。土壌の中には鋳造に関連して使用された粘土の探掘跡も見られる。また、前回調査で検出されていた工房跡も続きが検出された。遺構の分布は、調査区北側は擾乱が多かったが、遺構も薄い傾

向が見られた。遺構の重複からは最低3時期の区分が可能である。鋳造関連遺構及び井戸跡の時期、次いで掘立柱建物跡、そして溝跡という大まかな変遷が考えられる。

出土遺物の総量は多くないが、常滑の甕片、青磁片、在地産の埋ね鉢等の他にが壁、埴等が出土した。

第14図 A地点の遺構



ア 鑄造関連遺構

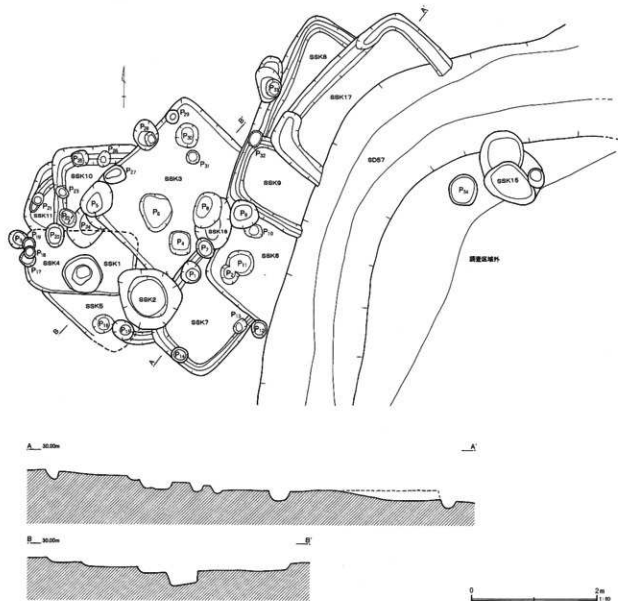
第16鑄造遺構群 (第15図～第24図)

金井遺跡B区は、北東に伸びる台地の台地上および東側斜面に展開する。今回の調査区は台地上の一部と東側の緩斜面の一部である。第16鑄造遺構群 (略称SS16) は、東側の緩斜面部にあたる調査区のN-11グリッドに位置する。

本遺構群は、西側から東側に緩やかな傾斜をもつ地形を利用した鑄込み土壌群と考えられる。円形の遺構と方形または長方形の竪穴状遺構が重複して検出され、

第1号鑄造土壌 (略称SSk1) ～第18号鑄造土壌 (SSk18) とし、第12～14、16号は欠番である。円形の遺構は炉跡と考えられ、長方形の遺構は輪座の可能性もあるが不明、規模のやや大きな方形の遺構は鑄込みなどの作業場の可能性があり、これらが組み合わせられて鑄造単位が構成されていたものと考えられる。この単位が複数重複したものと考えられる。覆土は焼土粒子、炭化粒子、鉄滓などの暗灰色土に覆われていた。

第15図 第16鑄造遺構群



第1号鑄造土壌

本土壌は、遺構群の南西に位置し、第4、5号鑄造土壌を切り込んで造られていた。形態は円形で、規模は長径62cm、短径58cm、深さ43cmである。主軸方位はN-35°-Wである。覆土の第1、2層は暗灰褐色および暗黄褐色土で炉壁片を多く含む、粘性、しまりをもつ。第3層は黒褐色土で鉄滓を多量に含む、焼土、炭化物を多く含む。第4層は暗黄褐色土でロームブロック、ローム粒子を多く含む。

検出した鑄造遺物は鉄滓、白色滓、炉壁、鉄塊、羽口、木炭である。

第2号鑄造土壌

本土壌は、遺構群の南西に位置し、第1号鑄造土壌の東側である。第3、4、5、7号鑄造土壌を切り込んで造られていた。形態は円形で、規模は長径105cm、短径95cm、深さ70cmである。主軸方位はN-54°-Wである。覆土の第1層は暗灰茶褐色で鉄滓を多量に含む、粘性、しまりをもつ。第3層は暗オリーブ灰色土でロームブロック、焼土ブロックを少量含む。

検出した鑄造遺物は鉄滓、白色滓、炉壁、鉄塊、羽口、鑄型である。

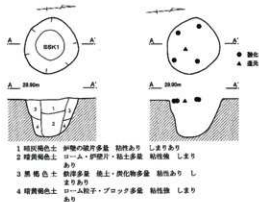
第3号鑄造土壌

本土壌は、遺構群の中央に位置し、第4、5、10号鑄造土壌を切り込んで造られ、第2、6、7、9、18号鑄造土壌に切られていた。形態は方形で、規模は長径240cm、短径205cm、深さ12~20cmである。主軸方位はN-43°-Eである。覆土の第1層は暗灰褐色土でローム粒子を少量、焼土粒子をやや多く含む。粘性、しまりをもつ。第2層は暗黄褐色土でロームブロック多量、焼土粒子少量である。堆積状況は人為堆積とみられる。

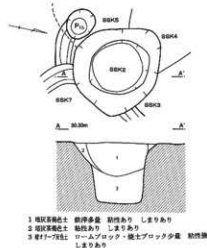
作業面は、地山のローム面を利用し平坦である。掘り込みは浅く、壁は垂直に立ち上がる。

南側には、第1、2号鑄造土壌が存在する。これらの土壌の性格は溶解炉の基底部分に据え付けられる炉跡の下部構造の可能性も考えられ、第3号鑄造土壌がこれらに伴う関連の作業面との見方もできるが、鑄込み土壌の可能性もあり性格は不明である。

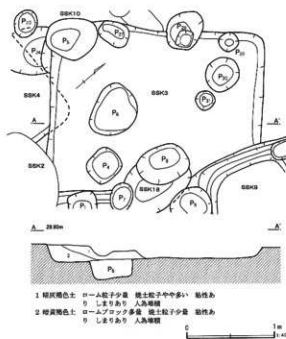
第16図 第1号鑄造土壌



第17図 第2号鑄造土壌



第18図 第3号鑄造土壌



第4号鋤造土壌

本土壌は、遺構群の南西に位置し、第5、10、11号鋤造土壌を切り込んで造られ、第1、2、3号鋤造土壌に切られていた。形態は長方形で、規模は長径180cm、短径102cm、深さ11~15cmである。主軸方位はN-1°-Eである。

作業面は、地山のローム面を利用し平坦である。掘り込みは浅く、壁はなだらかに立ち上がる。

第5号鋤造土壌

本土壌は、遺構群の南西に位置し、第1、2、3、4号鋤造土壌に切られていた。形態は長方形と推定される。規模は長径155cm、短径142cm、深さ9cmと浅い。主軸方位はN-47°-Wである。

本遺構は軸方向が第3号鋤造土壌と同じであり、約1.46mほど南西に位置する。

第6号鋤造土壌

本土壌は、遺構群の南東に位置し、第3、7号鋤造土壌を切り込んで造られ、第9、8号鋤造土壌に切られていた。形態は方形で、規模は長径135cm、短径130cm、深さ11cmである。主軸方位はN-43°-Eである。

本遺構は軸方向が第3、5号鋤造土壌と同じであり、第3号鋤造土壌東側に位置する。

第3・5・6号鋤造土壌は軸方位が近似し、浅い掘り込みで壁際に周溝をもたず遺構の構造も近似するなどの共通点がみられる。

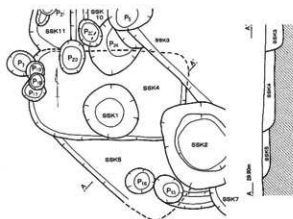
第7号鋤造土壌

本土壌は、遺構群の南東に位置し、第3号鋤造土壌を切り込んで造られ、第2、6、8号鋤造土壌に切られていた。形態は長方形で、規模は長径155cm、短径143cm、深さ2~6cmである。主軸方位はN-38°-Eである。

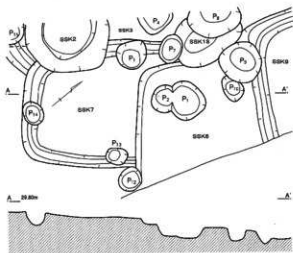
第8号鋤造土壌

本土壌は、遺構群の北東に位置し、第9、17号鋤造土壌に切られていた。形態は方形で、規

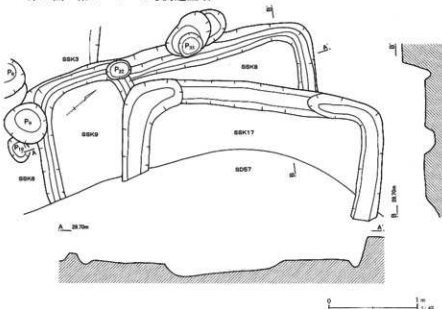
第19図 第4・5号鋤造土壌



第20図 第6・7号鋤造土壌



第21図 第8・9・17号鋤造土壌



楕は長径206cm、短径76cm、深さ25cmである。主軸方位はN-26°-Eである。

第9号鋳造土壌

本土壌は、遺構群の北東に位置し、第3、6、8号鋳造土壌を切り込んで造られ、第17号鋳造土壌に切られている。形態は長方形で、規模は長径131cm、短径76cm、深さ8~10cmである。主軸方位はN-60°-Wである。

第17号鋳造土壌

本土壌は、遺構群の北東に位置し、第8、9号鋳造土壌に切っている。形態は方形で、規模は長径297cm、短径140cm、深さ5cmである。主軸方位はN-45°-Eである。

第8・17号鋳造土壌は規模も大きく壁溝を伴う。また、第7・9号鋳造土壌は長方形で周溝を伴い規模も近い。

第10号鋳造土壌

本土壌は、遺構群の北西に位置し、第11号鋳造土壌を切り込んで造られ、第3、4号鋳造土壌に切られていた。形態は方形で、規模は長径133cm、短径132cm、深さ16cmである。主軸方位はN-2°-Wである。

第11号鋳造土壌

本土壌は、第10号鋳造土壌の西側に位置し、第4、10号鋳造土壌に切られていた。形態は長方形で、規模は長径110cm、短径41cm、深さ18cmである。主軸方位はN-11°-Eである。

第15号鋳造土壌

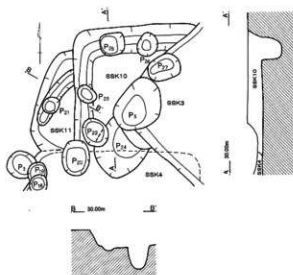
本土壌は、遺構群の東側に位置しPit1~Pit3が存在する。第57号溝跡の東側にあたる。形態は不整形で、規模は長径125cm、短径90cm、深さ12cmである。主軸方位はN-31°-Eである。検出した鋳造遺物は鉄滓、白色滓、炉壁、鉄塊、木炭、羽口である。

第18号鋳造土壌

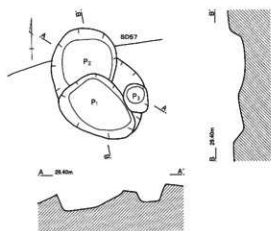
本土壌は、遺構群の中央に位置する。第3・6・7号鋳造土壌を切り込んで造られ、後世の柱穴に切られていた。形態は円形で、規模は長径81cm、短径57cm、深さ14cmである。主軸方位はN-8°-Eである。

土壌底面の周囲は被熱され赤褐色である。

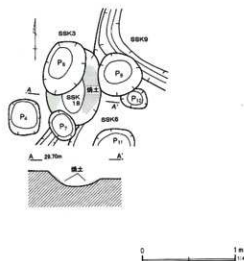
第22図 第10・11号鋳造土壌



第23図 第15号鋳造土壌



第24図 第18号鋳造土壌



第17鑄造遺構群 (第25・26図)

第17鑄造遺構群 (SS17) は、調査区北側のL-11グリッドに位置する。

本遺構群は、金井遺跡B区の中で最も地形が高く、台北北端部にあたり、本遺構群は第1号鑄造土壌 (略称SSk1) ~ 第3号鑄造土壌 (SSk3) が存在する。

第1号鑄造土壌

本土壌は、第3号鑄造土壌を切り込んで造られていた。形態は楕円形で、規模は長径88cm、短径56cm、深さ46cmである。主軸方位はN-8°-Wである。覆土中からは鉄滓、白色滓、炉壁、鉄塊、羽口、木炭、鑄型などの鑄造遺物を多く検出した。

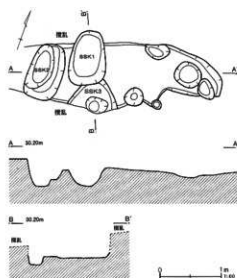
第2号鑄造土壌

本土壌は、第1号鑄造土壌の西側に位置し、形態は楕円形で、規模は長径98cm、短径52cm、深さ48cmである。主軸方位はN-5°-Wである。覆土の第7層は暗黄褐色土で焼土ブロックを主体とする。

第3号鑄造土壌

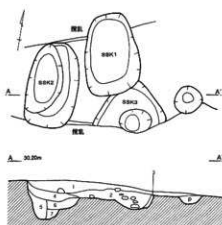
本土壌は、第1号鑄造土壌の南側に位置し切られて

第25図 第17鑄造遺構群

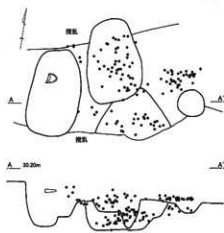


いた。形態は楕円形で、規模は長径80cm、深さ32cmである。覆土中からは鉄滓、白色滓、炉壁、鉄塊、羽口、木炭、鑄型などの鑄造遺物を多く検出した。

第26図 第1・2・3号鑄造土壌



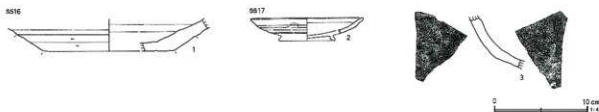
- | | |
|---------|------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 焼土ブロック・鉄滓少量 粘性あり しまりあり |
| 2 暗褐色土 | 焼土ブロック少量 鉄滓多量 粘性あり しまりあり |
| 3 暗黄褐色土 | 再焼塊ローム 粘性強 しまりあり |
| 4 暗茶褐色土 | 焼土粒子・炭化物少量 白色軽石含む 粘性あり しまりあり |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック・焼土粒子散在 粘性強 しまりあり |
| 6 暗褐色土 | 焼土ブロック散在含む 粘性強 しまりあり |
| 7 暗黄褐色土 | 焼土ブロックを主体 粘性強 しまりあり |



鑄造遺構群からは鑄造遺物以外の土器類は殆ど出土していない。第27図1は第16鑄造遺構群出土。捏ね鉢と思われる。推定底径14cm。外面は篋削りされる。内面は磨耗して平滑であるが、表面は斑状に剝離している。胎土は石英、長石などの他に礫を多く含み粗い。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。2・3は第17鑄

造遺構群出土。2は、灰釉陶器皿。口縁部約10%の残存である。口縁部外面以下は無釉。推定口径12cm。胎土は緻密で、やや黄色味のある灰色を呈する。焼成良好。3は、常滑産と思われる甕の頸部付近の破片である。外面は自然釉が付着する。

第27図 第16・17鑄造遺構群出土遺物



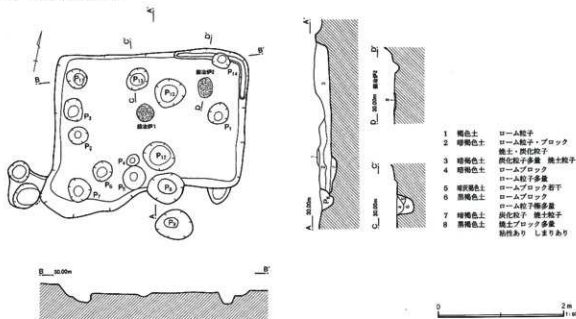
イ 竪穴状遺構 (第28図)

調査時には第112号土壌としたか銀冶炉を伴う竪穴状遺構で、前回報告の第85号土壌の北側の未調査部分を検出した。全体の形態は隅丸長方形を基本とし、南西部分か張り出している。規模は長軸3.03m、短軸2.16m、深さ20cmである。覆土は焼土粒子及び炭化粒子を多量に含む暗褐色土であった。前回調査では銀冶炉は

1か所であったが、北東部分に新たにもう1か所検出された。また、北東部分は壁溝状にL字型に掘り込みが認められた。ピットは新たに3基検出したが本竪穴に伴うかは不明である。

遺物は、出土しなかった。

第28図 第112号鑄造土壌

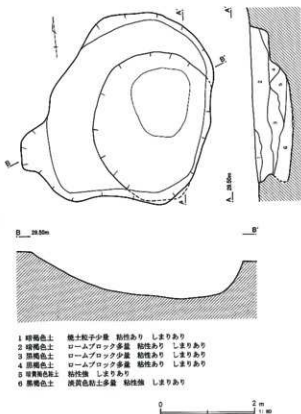


ウ 粘土採掘場 (第29図)

K・L-12グリッドで検出された。第272・273号土壌が複合している。掘り上がりはややまとりのある形になっているが、掘り込みは6回以上あったことが調査時の所見で窺われた。確認面から40cmほどのところで幅0.8~1mの平坦面を持ち、更に40cmほど掘り込まれている。粘土層は二段目の掘り込み部分から下にあり、この粘土を採取したものと考えられる。底面は砂礫層に達しており、南及び東側は横方向に掘削しているため一部オーバーハングしている。規模は長軸4.1m、短軸3.4mで深さは1.07mである。覆土は暗褐色土及び黒褐色土で、1層は焼土粒を含むが、他はいずれもロームブロック及び粘土を多量に含んでいる。特に最下層は黒褐色土と粘土の互層であり埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物は、須恵器甕小破片1点、土師器細片3点のみで、混入したものと判断できる。また、図示できる遺物はない。

第29図 第272・273号土壌



エ 掘立柱建物跡

第27号掘立柱建物跡 (第30図)

M・N-10グリッドで検出された。調査区北側寄りにあたる。前回調査分を含めて図上で復原した。重複が激しく第28・30号掘立柱建物跡、第17号火葬墓、第54・58号溝跡が切り合っている。各溝跡よりは古いが他の遺構との新旧関係は不明である。規模は3間×3間と考えられるが1間×3間の身舎の両側に庇がついたものとも見える。柱間は、桁行は1.90×2.10×1.75mで計5.75m、梁行は1.50×2.45×1.30mで計5.25mである。軸方位はN-62°-Eである。柱穴は小規模なものが多い。形態はいずれも円形で、検出面での直径は24~65cm、深さは12~57cmである。覆土は黒褐色土を主体とするものであった。

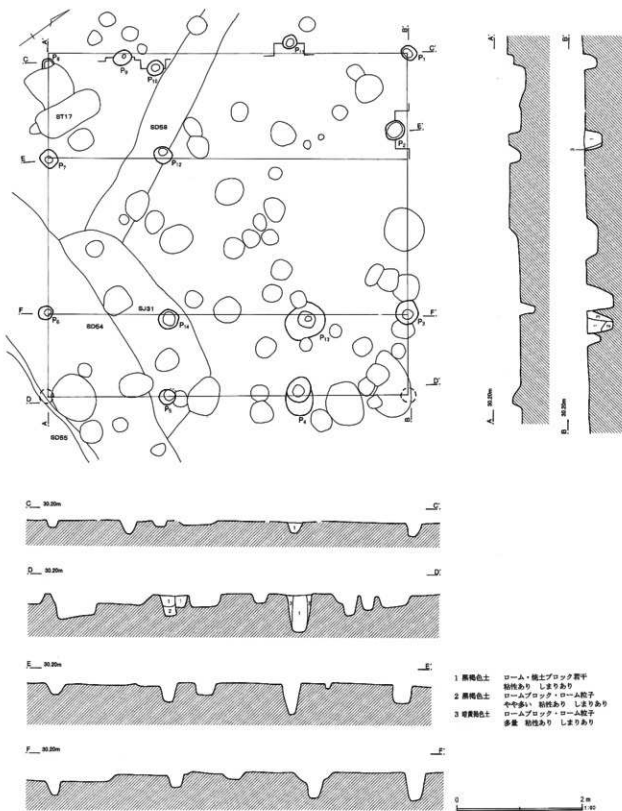
遺物は、出土しなかった。

第28号掘立柱建物跡 (第31図)

N-10グリッドで検出された。第27号掘立柱建物跡、第265号土壌、第58号溝跡、第17号火葬墓と重複する。重複関係から第265号土壌、第58号溝跡より古いと考えられる。規模は2間×2間と考えられる。東辺は3間になる可能性がある。柱間は、桁行は1.90×2.20mで計4.10m、梁行は1.50×1.25×1.20mで計3.95mである。軸方位はN-7°-Wである。柱穴は小規模なものが多い。形態はいずれも円形で、検出面での直径は32~53cmである。深さは9~64cmと幅があるが四隅の柱穴は深くしっかりしている。覆土は暗褐色土を主体とするもので、焼土粒子を含むものであった。

遺物は、出土しなかった。

第30図 第27号掘立柱建物跡



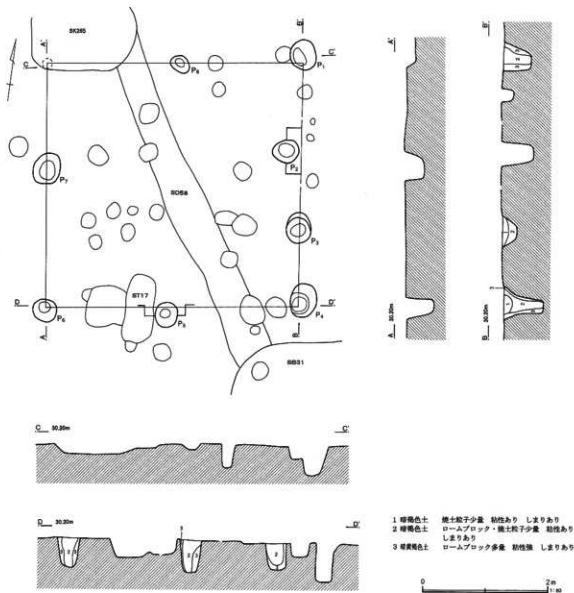
第28号掘立柱建物跡 (第32図)

N-10・11グリッドで検出された。建物南側は前回調査の図面を含めて、全体を図上で復原した。第28号掘立柱建物跡の3.2m東にあり、第28号掘立柱建物跡の南辺を延長すると本建物跡の北辺にあたる。第30号掘立柱建物跡、第269号土城、第54・55・61号溝跡と重複する。第269号土城、第54・55号溝跡より古い。規模は4間×2間と思われるが、柱穴の配列はやや不規則である。また、建物内側にも複数の柱穴が検出された

が、本建物跡に伴うものは不明である。桁行5.30m、梁行4.30mである。軸方位はN-13°-Wである。柱穴は小規模で、形態は円形或いは楕円形である。検出面での直径は26~50cm、深さは10~44cmである。覆土は黒褐色土を主体とするものであった。

遺物は、P17から同じく須恵器甕小破片1点が出土しているだけで、図示できるものはない。

第31図 第28号掘立柱建物跡



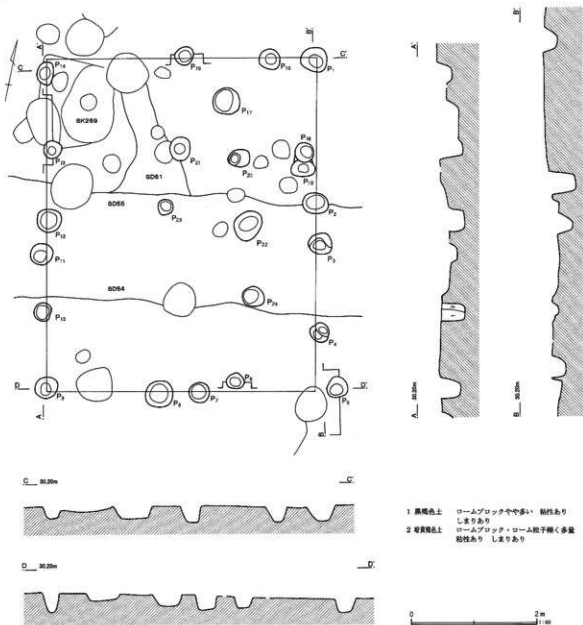
第30号掘立柱建物跡 (第33図)

N-10・11グリッドで検出された。建物南側は前回調査の図面を含めて、全体を図上で復原した。第27・29号掘立柱建物跡、第268・269号土壌、第54・55・61号溝跡、第16号建造構群と重複する。各溝構より古く、第16号建造構群より新しい。規模は4間×3間であるが、北東及び北西側の柱穴の規模が小さい。桁行9.15m、梁行6.20mである。軸方位はN-56°-Wである。柱穴はおおむね大小の2種類あり、規模の比較的大

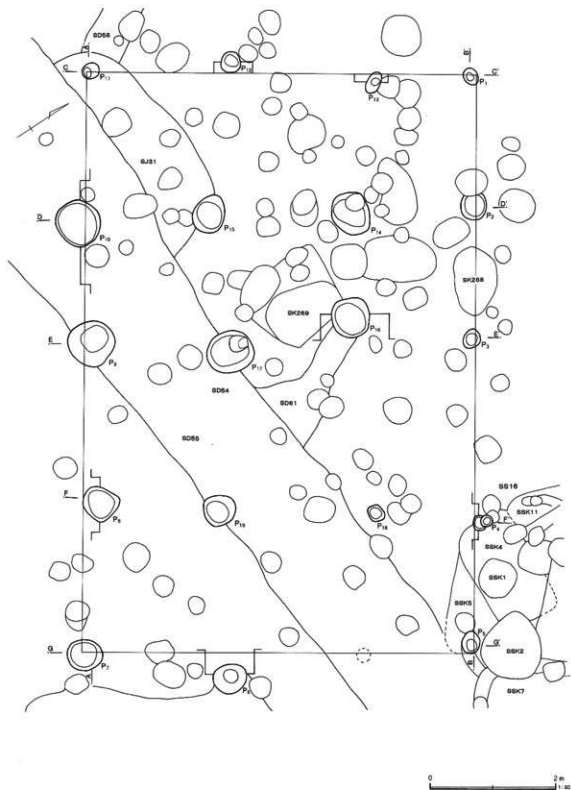
きな柱穴の身舎が、その北西と北東に庇がつくものかもしれない。柱穴の形態は隅丸方形に近いものもあるが、円形或いは楕円形が基本と思われる。検出面での直径は小さいもので26~30cm、大きいものは60~75cmである。深さは15~75cmである。覆土は暗褐色土を主体とするものであった。

遺物はP9から工師器細片4点を出土したが、図示できるものはない。

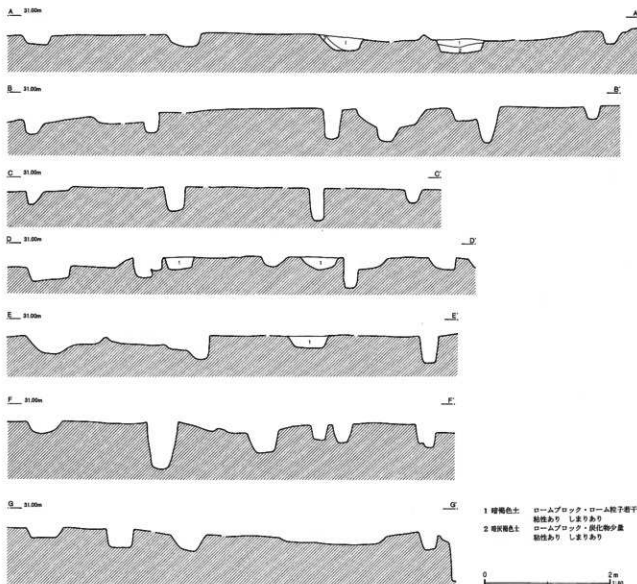
第32図 第29号掘立柱建物跡



第33图 第30号掘立柱建物跡 (1)



第34図 第30号掘立柱建物跡 (2)



オ 井戸跡

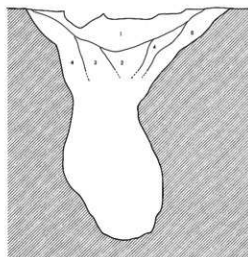
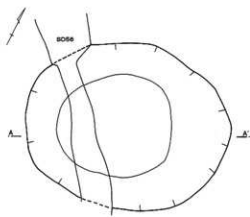
第15号井戸跡 (第35図)

N-9・10グリッドで検出された。第56号溝跡が上面を切っており、中央には井戸埋没後に第18号火葬墓が掘り込まれている。平面形は楕円形を呈する。掘り込みは上面から半ばにかけてロート状に狭くなり、下方は筒状となるが、下半分は大きく東に傾きながら水袋状に膨らんでいる。使用の途中で崩落したものである。覆土は黒褐色土が主で、堆積状況は自然堆積と思われる。断面は1.4mまでで、それ以下は重機により断ち割りを行ったが、断面図は作成できなかった。

規模は、検出面で4.40×3.50mで、深さは4.9mであった。

遺物は、覆土中から須恵器片8点、中世陶磁器類25点、打製石斧2点が出土した。須恵器及び打製石斧は混入である。第36図1は青磁碗である。底部約25%の残存である。推定底径6cm。軸は厚く、高台先端は無軸。胎土は緻密で灰白色を呈する。龍泉窯系。2は鉢か。底部約5%の残存である。胎土は小礫を含む。色調は明灰色で焼成は良い。3は甕。口縁部約20%の残存である。口縁部は外反して短く立ち上がる。口縁下か

第35図 第15号井戸跡



- | | | | |
|--------|--------------|------|-------|
| 1 赤褐色土 | ローン粒子少量 | 粘付あり | しまりあり |
| 2 黒色腐土 | ローン・黄土ブロック若干 | 粘性強、 | しまりあり |
| 3 黒色腐土 | ローンブロック多量 | 粘性強、 | しまりあり |
| 4 黒褐色土 | ローン粒子若干 | 粘性強、 | しまりあり |
| 5 黄褐色土 | ローン粒子多量 | 粘性あり | しまりあり |

0 2m 1:40

ら頸部にかけては横方向の連続した指押しの後、横方向の撫でを施している。胴部外面も指頭及び横方向の撫でが見られる。内面は口縁部は横方向の撫で、胴部は外面と同じ調整がされる。胎土は石英、赤色粒、礫を含み、酸化炭焼成される。在地産。4~6は鉢口縁部。いずれも10%ほどの残存である。口縁部内面には、浅く幅広の沈線が廻る。4は口縁端部を丸く、5はやや平坦に、6は摘み上げて鋭角に作る。胎土は粗く、いずれも長石、片岩などの礫を多く含む。色調は、4は表面は灰色を呈するが、内面はにぶい橙色、5・6は褐色である。焼成は良くない。在地産。7・8は同じく鉢の底部と思われるが、胎土は礫を含まず比較的硬質である。色調は淡橙色。焼成良好。残存は7は約10%、8は15%である。9はこね鉢の底部。約10%残存。外面は縦方向の筥削り調整。内面は使用により平滑になっている。

力 溝跡

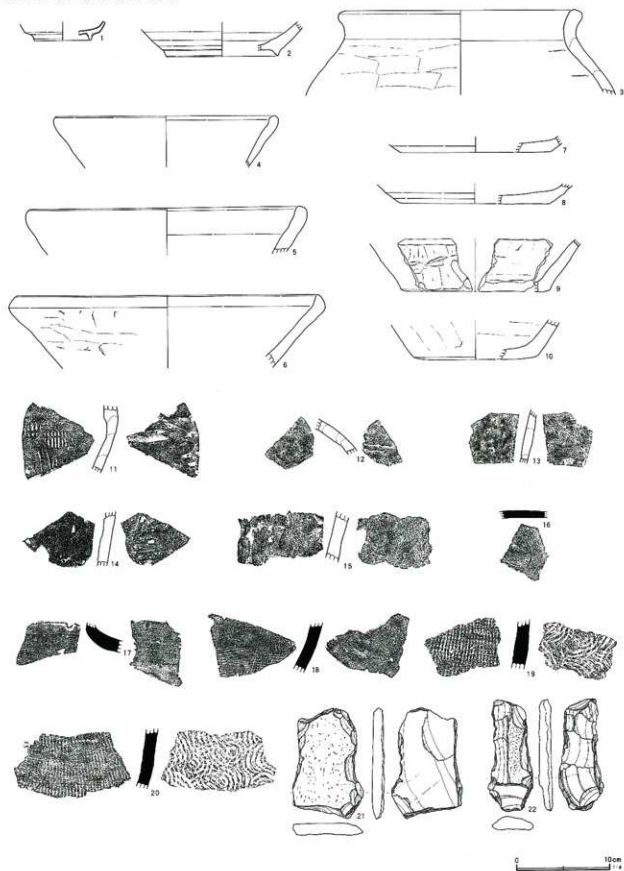
第54号溝跡 (第37図)

N-9~11グリッドにかけて検出された。前回調査の第12号溝跡の続きである。調査区の境で東西方向に向きを変える。第27・29・30号掘立柱建物跡、第16号造遺構と重複し、これより新しい。第55号溝跡と並行しているが、第55号溝跡が浅い。第55号溝跡は前回

胎土は長石を多量に含む。色調は橙褐色。焼成は良好で硬質。10は土鍋の底部と思われる。約15%残存している。内外面黒色で、外面は煤けているが底部外面は表面が摩滅しており灰白色の胎土が露出している。胎土は長石、片岩などの礫を多く含む。焼成は軟質で良くない。11~15は甕の胴部破片。いずれも硬質で焼成良好。常清産。16は須恵器環底部。18~20は須恵器甕胴部破片。21・22は打製石斧である。21は緩い括れを有する分銅形である。刃部はやや偏った直刃である。緑泥片岩の扁平な石材を用いている。幅7.5cm、長さ11.7cm。重量は161.2gである。22は片面に自然面を残す。短冊形の平面形で、刃部付近に最大径がある。刃部付近に細かい調整を加えている。石材は片岩起源のホルンフェルスである。最大幅は4.7cm、長さ11.8cm。重量は87.7gである。16以下は混入である。

調査の第10号溝跡の続きで、第12号溝跡は第10号溝跡より古いという調査所見に矛盾しない。今回検出した長さは19mである。幅は0.85~1.6mであり、深さは浅い所7cm、深い所は20cmであった。前回調査分を含めると長さは62.4mになる。

第36图 第15号井戸跡出土遺物



遺物は、土師器片、陶磁器片など少量であるが混入が著しい。図示したのも混入と思われる。第40図1は蓋。鉄軸で模様が描かれる。推定口径7.4cm、2は磁石である。かなり使用されている。長さ12.9cm、幅2.5cm、厚さは最大で1.4cm残存していた。重量は80.9gである。遺物の時期は19世紀以降と思われる。

第55号溝跡 (第37図)

N-9-11グリッドにかけて検出された。前回調査の第10号溝跡の続きである。第54号溝跡と並行している。重複関係などは前述のとおりである。長さ18.2m、幅0.75-0.9m、深さ5-35cmである。第10号溝跡を含めた長さは63.8mである。

遺物は少なく、第54号溝跡と同じように中・近世の遺物が混入している。第40図3は常滑産と思われる薬片である。5は凝灰岩質の磁石。4は5と同じ石材であるが用途不明。

第56号溝跡 (第37図)

M・N-9グリッドで検出された。北西から南東方向に伸びる。北西端は調査区内で消失するが、前回調査の第51号溝跡或いは第52号溝跡に続く可能性がある。南東側は第54号溝跡にぶつかり、途中、第59号溝跡が接続しているが、それぞれの重複関係は不明である。また、第18号火葬墓、第15号井戸跡を切っている。長さ9.7m、幅0.7-1.2m、検出面からの深さ15-25cmである。

遺物は、染付が2点出土した。第40図6は筒丸形の小碗。推定口径7cm、肥前系と思われる。7は端反形の小杯。推定口径7cm、器高2.8cm、推定底径2.8cmである。胎土は白色で、釉はガラス質である。19世紀代であろう。

第57号溝跡 (第38図)

N-11グリッドで検出された。調査区の南東の隅にあたり、前回調査の第7号溝跡が南から続き、本調査区内で東に向きを変え前回調査の第24号溝跡に続く。第54・55号溝跡がぶつかっているが重複関係は不明である。第16銅造遺構群より新しい。検出された長さ9.7m、幅は1.26-1.78m、深さは19-42cmで掘り込みは

しっかりしていた。前回調査分を含めると長さは49.7mになる。

遺物は須恵器破片2点が出土したのみで、図示できるものはない。

第58号溝跡 (第37図)

M・N-10グリッドで検出された。第56号溝跡の東約7mの位置にあり同溝跡と並行している。第265号土壌と重複し、これより古いと考えられる。南側は第31号住居跡を切って第4号溝跡まで延びるが、新田関係は不明である。長さ6.57m、幅0.45-0.65m、深さは5cm前後で極めて遺存状況が良くない。

遺物は、出土しなかった。

第59号溝跡 (第39図)

M・N-9グリッドからM-11グリッドにかけて検出された。東西に伸びる溝跡で、西側は南に向きを変え第56号溝跡に続く。検出された長さは22.7m、幅は0.5-0.8m、深さは10cm前後である。

遺物は、第40図のカワラケと古銭が出土した。8は、推定口径10cm、轆轤成形である。砂粒、角閃石を含み、色調は褐色を呈する。9は寛永通寶、10は天聖元寶、11は熙寧元寶、12は不明である。

第60号溝跡 (第38図)

L-11・12グリッドで検出された。東西方向の溝である。途中で北側に延びる溝が分岐している。検出された長さ10.7m、幅0.4-0.82m、深さは11-32cmである。

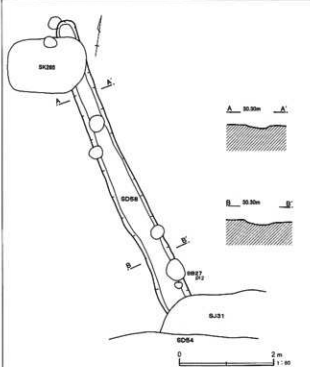
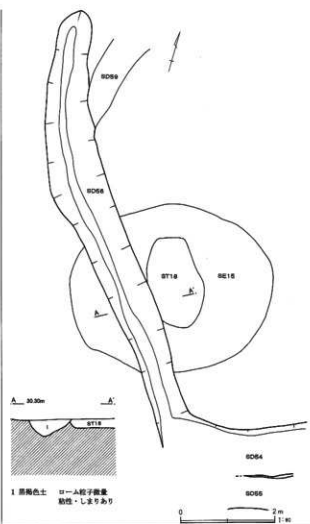
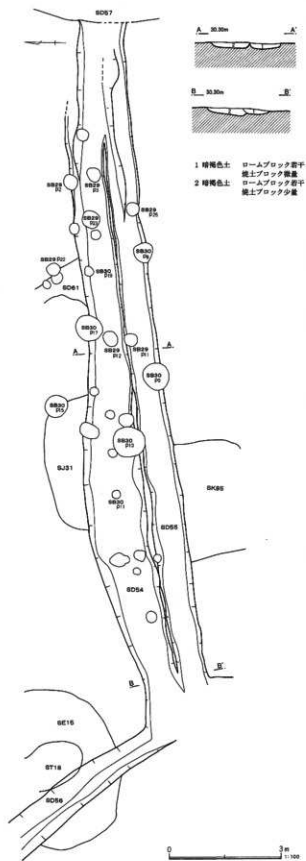
遺物は須恵器片、陶器片などが少量出土している。遺構の時期は中世以降と思われる。第40図13は陶器。推定底径7.4cm、内面に赤色の釉が施される。14は須恵器環。口径12.5cm、底径5.9cm、器高3.6cmである。外面に墨書がある。鳩山産。

第61号溝跡 (第39図)

N-10グリッドで検出された。北西から南東方向の溝で南側は広がって第54号溝跡にぶつかる。長さ約2m、幅0.4-1.2m、深さは10cm前後である。

遺物は、出土しなかった。

第37図 溝跡 (1)



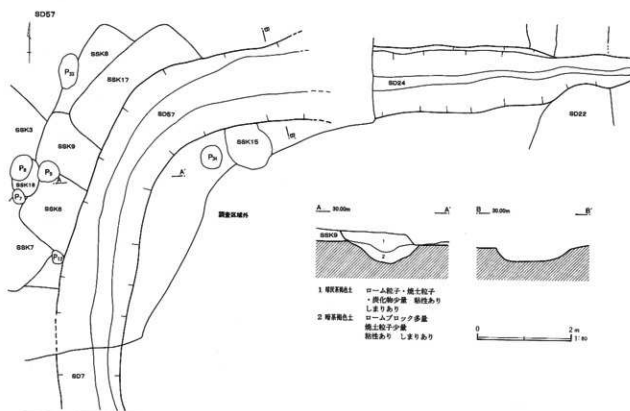
第62号溝跡 (第39図)

L-11・12グリッドで検出された。南側は攪乱で大きく壊されている。調査区内で東に方向を変える。長さ

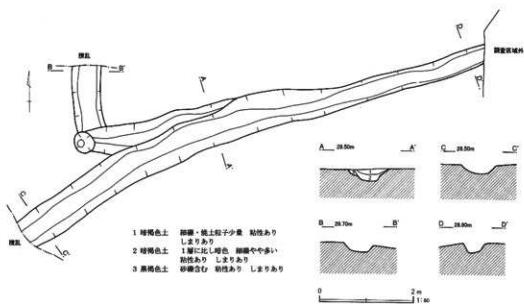
8 m、幅1.1~1.9m、深さは16~30cmである。

遺物は、出土しなかった。

第38図 溝跡 (2)

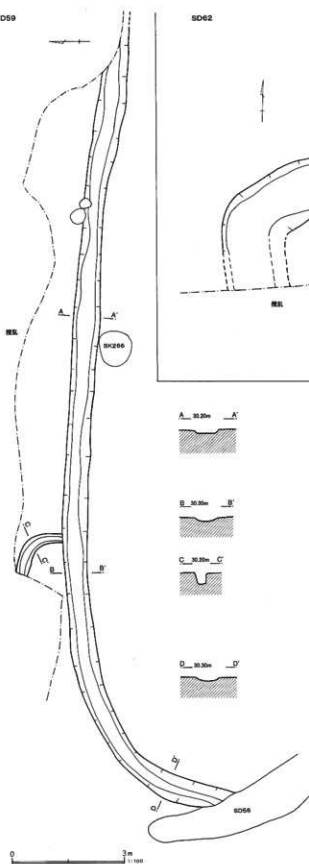


SDB0

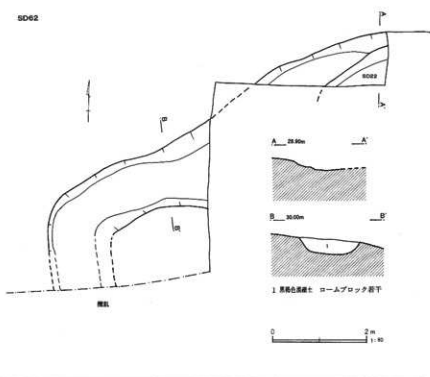


第39図 溝跡 (3)

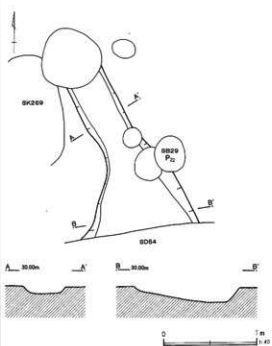
SD59



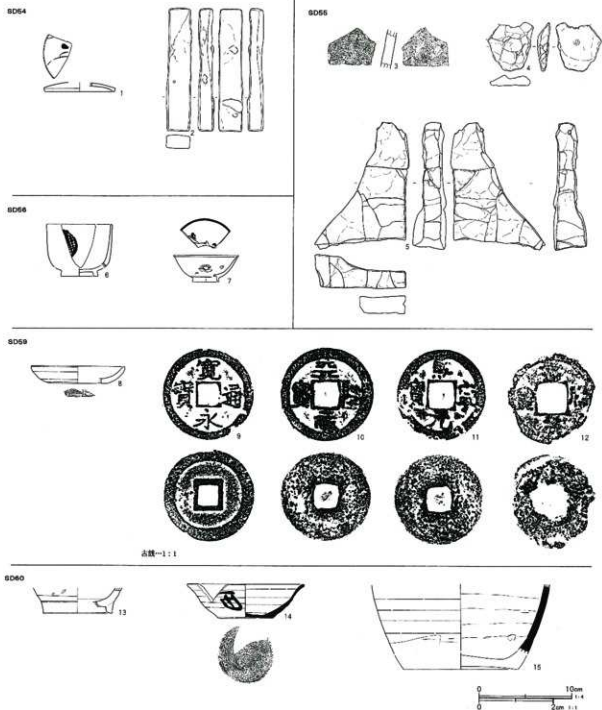
SD62



SD61



第40図 溝跡出土遺物



キ 火葬墓

第17号火葬墓 (第41図)

N-10グリッドで検出された。隅丸長方形の土壇のわきに径0.6mほどの不整円形の掘り込みがあり底面のビットで繋がっていた。本体部分は1.05×0.38m。深

さ22cmと浅く小さい。良く焼けており、頭骸骨などの骨片が検出された。

第18号火葬墓 (第41図)

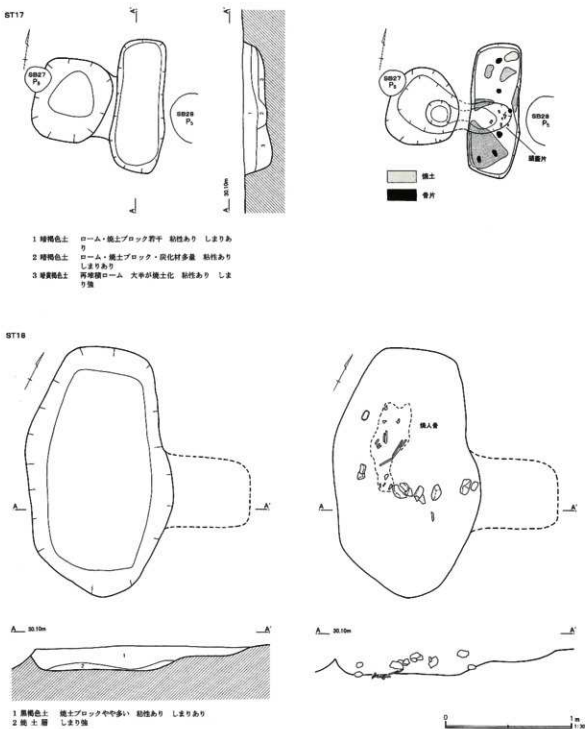
N-9グリッドで検出された。第15号井戸跡が埋ま

った後に掘り込んでいる。第56号溝跡に切られている。T字形を呈し、1.95×1.16m。深さ21cmと大形である。底面に焼土が発達しており人骨が見られた。覆

土中には拳大の礫が検出された。

遺物は、須恵器破片、陶器鉢片3点が検出されたが、図示できるものはない。

第41図 第17・18号火葬墓



ク 土壌

第265号土壌 (第42図)

M・N-10グリッドで検出された。第28号掘立柱建物跡、第58号溝跡と重複する。平面形は隅丸長方形を呈する。大きさは1.70×1.18mで、深さは20cmである。

上層から鉄滓を出土しているが、土器類は出土しなかった。

第266号土壌 (第42図)

M-10グリッドで検出された。不整形である。重複はない。底面に深さ29cmのピットが確認された。直径は0.95m、深さは9cmである。

遺物は、出土しなかった。

第267号土壌 (第42図)

M-11グリッドで検出された。不整形楕円形である。他の遺構との重複はない。大きさは、0.68×0.44m、

深さは19cmである。

遺物は、出土しなかった。

第269号土壌 (第42図)

N-10グリッドで検出された。不整形の土壌である。第29・30号掘立柱建物跡と重複する。大きさは1.40×1.24m、深さは60cmである。

遺物は、出土しなかった。

第270号土壌 (第42図)

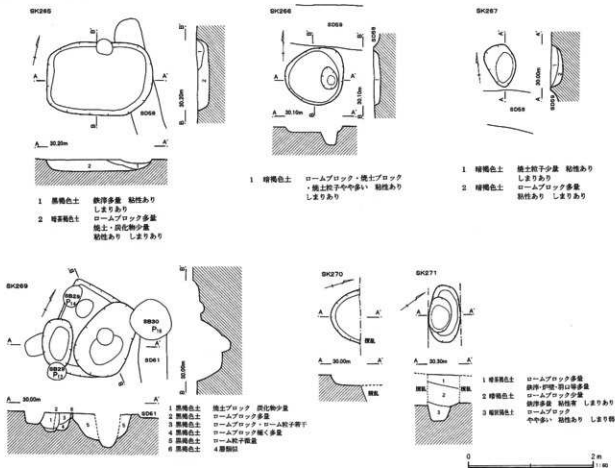
M-11グリッドで検出された。円形乃至楕円形と思われるが北側は擾乱によって壊されている。大きさは0.83m確認された。深さは18cmである。

遺物は、須恵器環片、土師器細片15点が出土したが図示できるものはない。

第271号土壌 (第42図)

K-11グリッドで検出された。楕円形の土壌であ

第42図 土壌



る。両側を攪乱によって削られているため本来の形を留めていないかもしれない。大きさは0.88×0.50m、

ケ グリッド出土遺物 (第43図)

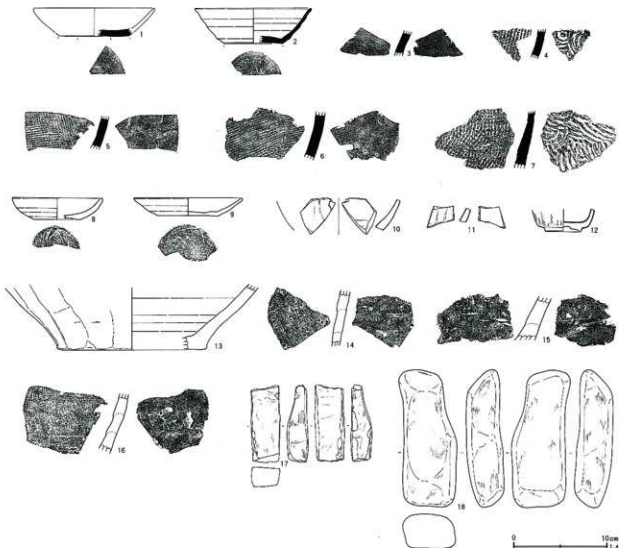
1・2は須恵器杯。いずれも底部外面は回転鏡削りされる。鳩山産。1は推定底径7.4cm、2は推定口径12.4cm、同底径6cm、器高3.7cmである。3～7は須恵器甕。3は頸部、櫛描きの波状文が施される。他は胴部破片で、平行叩きである。4・7は内面に当て具痕があるが、5・6は当て具痕を消している。4・7は鳩山産。8・9はカワラケ。8は推定口径9.6cm、同底径5cm、器高2.3cmである。轆轤成形で、淡褐色で軟質。

深さは79cmである。

遺物は、染付碗が出土している。

9は推定口径11.6cm、同底径6.4cm、器高1.9cmである。轆轤成形で褐色。やや硬質である。10～13は青磁運弁文碗。10・11は龍泉窯系。10はやや黄色味が強い。12は高台内無釉で緑の発色が強い。13は壺底部。推定底径16cm、内面には薄く釉がわかる。常滑産。14～16は陶器破片。胎土は砂粒、長石を含む。淡黄灰色で表面は褐色から暗褐色。焼成良好。17・18は砥石。17は79.28g。18は599.45g。

第43図 グリッド出土遺物



(2) B地点

B地点では、竪穴状遺構1基、粘土採掘壕2基、掘立柱建物跡6棟、井戸跡2基、溝跡3条、土壌17基を検出した。掘立柱建物跡では7間×3間に四面庇を持つものが検出された。本遺跡で最大の規模を持つもの

ア 銕造関連遺構

竪穴状遺構 (第45図)

本土壌は、調査区南側のQ-10グリッドに位置する。第292号土壌としたものである。重複関係は第31号掘立柱建物跡に切られている。形態は長方形で、規模

イ 粘土採掘壕 (第46図)

P・Q-10グリッドで検出された。第279・281号土壌としたものである。覆土中に地山の粘土を含み、粘土採掘壕と判断された。第31号掘立柱建物跡、第65号溝跡と重複する。第279号土壌は隅丸方形を呈し、規模

第44図 B地点の遺構

である。本調査区では銕造土壌は検出されておらず、集落の中心的な建物と考えられる。

遺物は少量出土したのみである。銕造関連遺物もA区に比べると少ない。

は長径4.6m、短径2.3m、深さ18cmである。主軸方位はN-62°-Wである。覆土は第2層の黒色土が主体である。床面は平坦である。

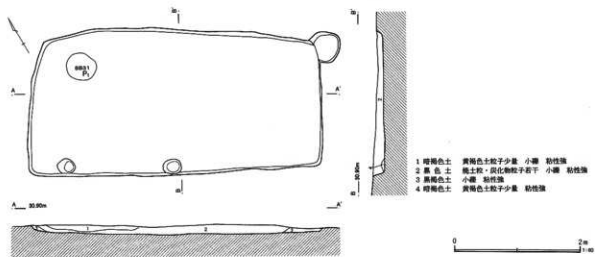
遺物は、白磁の合子蓋、陶器皿の破片を検出した。

は2×2m、深さは59cmである。第281号土壌は隅丸長方形を呈する。規模は長径3.02m、短径1.23m、深さは67cmである。

遺物は、第279号土壌覆土中位から須恵器甕の口縁部



第45図 第292号土壇



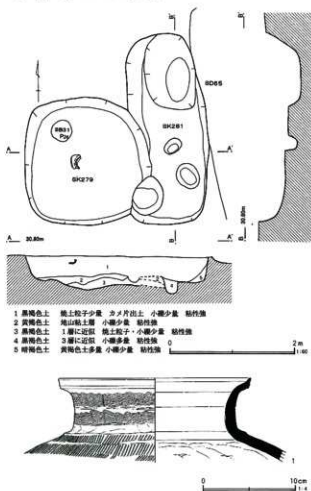
片が出土した。第46図1は口縁部から肩にかけて約40%の残存である。頸部は直立し、口縁部は外反する。口縁部外面は沈線有し、頸部は二段に櫛描き波状文が施される。波状文の間には不連続な沈線が1条入る。胴部外面は平行叩きである。口縁部内面は横方向の撫で、胴部内面は指頭痕、篋状工具による撫でが施され、当て具痕が丁寧に消されている。推定口径20.6cmである。胎土は礫、砂粒を少量含み、灰白色を呈する。焼成は良好である。

ウ 掘立柱建物跡

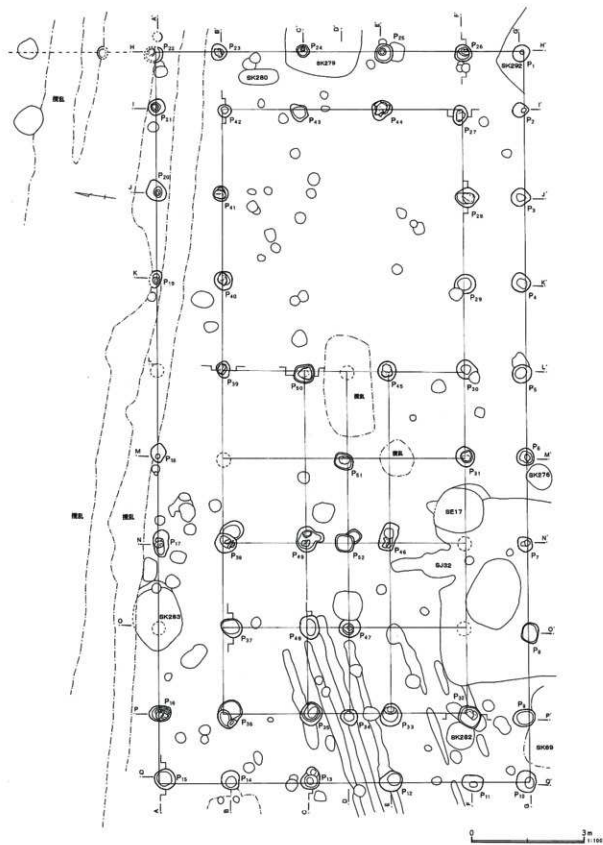
第31号掘立柱建物跡 (第47~49図)

P・Q-8・9・10グリッドにかけて検出された。7間×3間の身舎に四面庇が付くものと考えられる。身舎の規模は15.9×6.3mである。柱穴配置はほぼ等間隔で2.2m乃至は2.3mである。東側3間分は内部に柱穴は検出されなかった。土間のような空間であったと考えられる。西側4間×3間分は床を持つ空間であろう。庇部分は南側は1.5m、北側は1.7mであるが、東側は1.5m、西側は1.8mである。全体の大きさは、19.5×9.7mとなる。方位はN-82°-Eである。

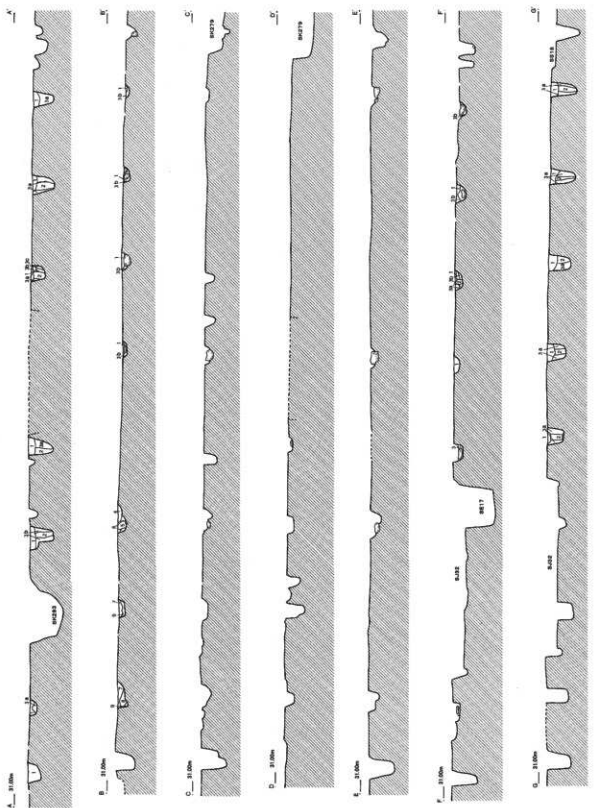
第46図 第279・281号土壇



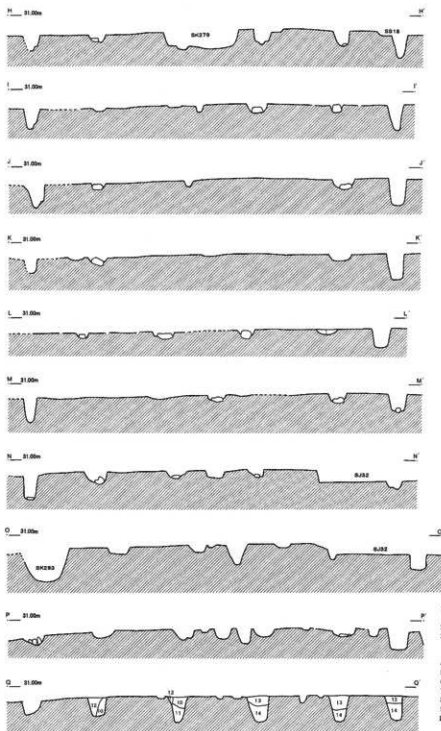
第47图 第31号孤立柱建物跡 (I)



第48図 第31号掘立柱建物跡 (2)



第49図 第31号掘立柱建物跡 (3)



- 1 黒褐色土 (取寄り穴) 黒色土と赤褐色土主体
焼土粒子
- 2 暗赤褐色土 (柱溝) 黒色土主体、しまり機
黒色土と赤褐色土を混在
- 3 暗赤褐色土
3aは原色土主体、b,cに混ざって
赤褐色土の量を増す
黄褐色土ブロック
- 4 暗褐色土 (柱溝) 焼土粒子・炭化物若干
- 5 黒色土 (柱溝) 焼土粒子・炭化物若干
- 6 赤褐色土 (柱溝) 黄褐色土ブロック少量
- 7 暗褐色土 焼土粒子 炭化物
- 8 暗褐色土 炭化物
- 9 暗赤褐色土 黄褐色土ブロック
- 10 暗褐色土 焼土・炭化物粒子若干
黄褐色土粒子少量
- 11 黒褐色土 1層に区別
- 12 暗褐色土 黄褐色土ブロック
- 13 黒色土 暗褐色土主体 黄褐色土ブロック多量
- 14 暗褐色土 1層に比し黄褐色土ブロック少

0 3m
1:100

第50図 第31号掘立柱建物跡出土遺物

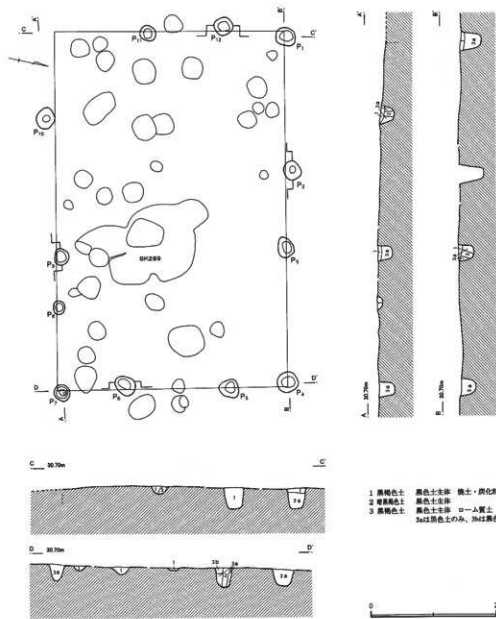


検出された52基の柱穴のうち底部分を含めて18基の柱穴に根石が検出された。根石を持つ柱穴は比較的浅く、根石を持たないものは掘り方が深い。また、P46・

49・52では柱穴の重複が見られた。

遺物は、約半数にあたる21基の柱穴から土師器・須恵器片・鉄滓など何らかの遺物が出土したが、図示で

第51図 第32号掘立柱建物跡



- 1 黒褐色土 黒色土主体 焼土・炭化粒子少量
 - 2 黄褐色土 黒色土主体
 - 3 黒褐色土 黒色土主体 ローア質土
- 3aは黒色土のみ、3bは黒色土とローア質土同量

きるものは殆どない。第50図1は龍泉窯系青磁蓮弁文碗である。2は陶器甕。外面は縦方向、内面は横方向に撫でられる。淡褐色。焼成良好。3は須恵器壺肩部破片。推定最大径18cm。胎土は白色粒を少量含む。灰色を呈し、焼成は良好である。

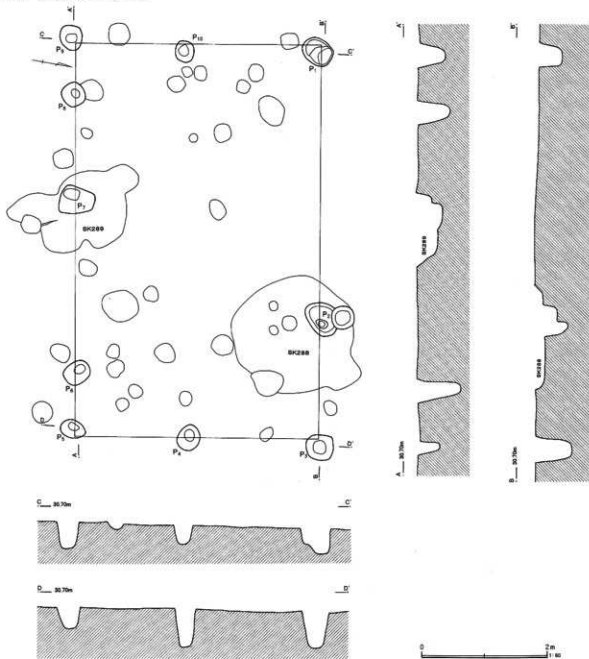
第32号掘立柱建物跡 (第51図)

P-8グリッドで検出された。第33・34号掘立柱建物跡、第289号土壌と重複するが、柱穴などの直接の切

り合いがないため新旧関係は不明である。3間×3間と思われるが柱穴配置は比較的不規則である。規模は5.60×3.70m、軸方位はN-75°-Eである。柱穴は円形ないし楕円形で直径21~35cm、深さは25cm前後である。

遺物は須恵器環小破片が1点出土しているが、図示できるものはない。

第52図 第33号掘立柱建物跡



第33号掘立柱建物跡 (第52図)

O・P-8グリッドで検出された。第32・34号掘立柱建物跡、第288・289号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。南辺は4間×2間と思われるが、北辺は3間と考えられる。規模は6.30×3.90m、軸方位はN-80°-Eである。柱穴は、円形ないしは隅丸長方形で、大きさは33~60cmである。深さは30~70cmである。

遺物は、柱穴から土師器細片、須恵器裏小片が1点ずつ出土しているが混入品と考えられる。図示できる

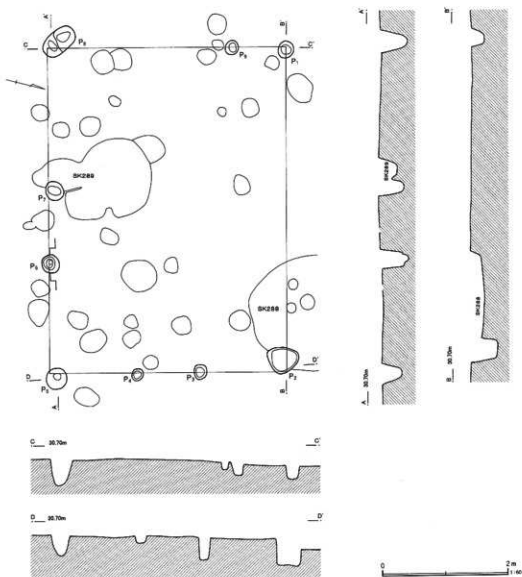
ものはない。

第34号掘立柱建物跡 (第53図)

O・P-8グリッドで検出された。第32・33号掘立柱建物跡、第288・289号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。規模は、5.10×3.80mである。軸方位はN-75°-Eである。3間×3間と考えられるが、検出されない部分が多く不規則な配置となっている。柱穴は小円形で直径20~30cmのものが多く、深さは10~47cmである。

遺物は、出土しなかった。

第53図 第34号掘立柱建物跡



第35号掘立柱建物跡 (第54図)

O・P-9グリッドで検出された。第36号掘立柱建物跡、第285・286・287号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。検出された柱穴から9基を抽出して振り当てたが、P5は底面に礫が検出された。建物規模は6.80×5.30mである。軸方位はN-13°-Wである。柱穴は円形ないし楕円形で、直径30~55cm、深さは

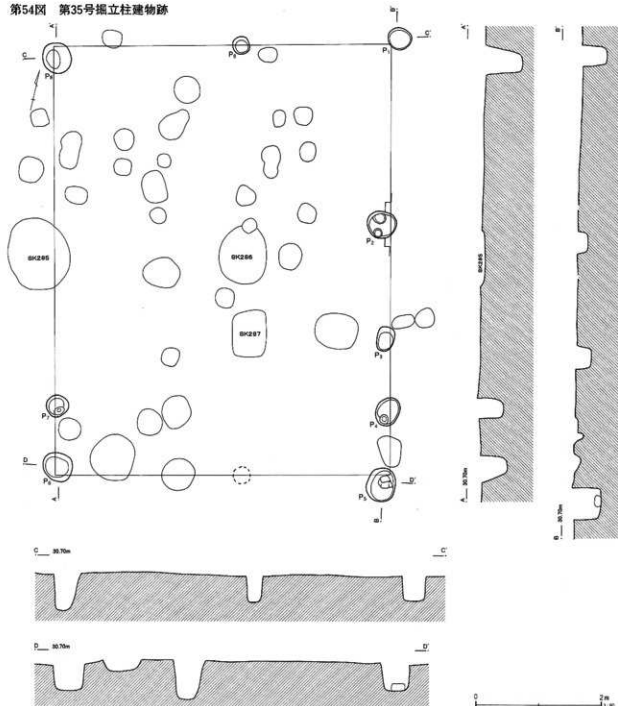
16~64cmである。

遺物は、出土しなかった。

第36号掘立柱建物跡 (第55図)

O・P-9グリッドで検出された。第35号掘立柱建物跡、第286・287号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。規模は6.00×5.80mである。3間×3間と思われるが梁行方向が不規則である。柱穴は円形乃至

第54図 第35号掘立柱建物跡



は隅丸方形である。大きさは30～70cmを超えるものまである。深さは10～65cmである。

エ 井戸跡

第16号井戸跡 (第56図)

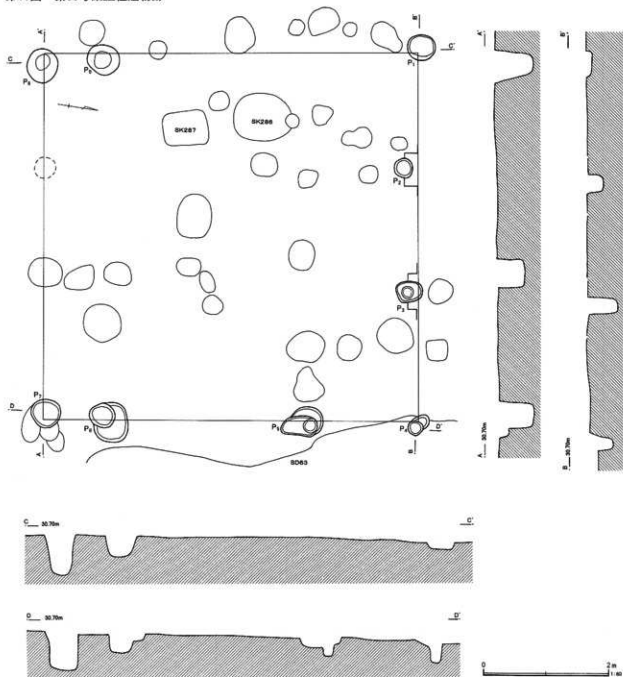
P-9・10グリッドで検出された。第36号掘立柱建物跡の東に位置し、本遺構の東には第64号溝跡がある。第63号溝跡と直接重複し、これより古い。平面形はやや崩れているか甲形を呈する。素掘りの井戸で、検出

遺物は、出土しなかった。

面下1mまでは直径を減じていくが、それ以下は円筒状となる。検出面での直径は約1.6mである。下部の直径は80cmである。深さは、検出面から1.75mで、底面は礫層に達していた。

遺物は、土師器環、甕などの小片17点、須恵器細片

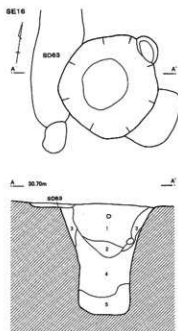
第55図 第36号掘立柱建物跡



4点、土鍋類の小片8点などが出土した。殆どが小片で図示できたのはわずかである。第57図1は壺。口縁部はわずかに外反しながら短く立ち上がる。口唇部はわずかに平坦に作るか鈍い。口縁部は内外面とも横方向の撫で、外面立ち上がり部分は指圧痕が残る。胴部外面は指圧痕がわずかに見られるが、摩滅が著しく観察できない。内面は撫でか施される。胎土は白色礫を多量に含む。色調は褐色を呈する。焼成は酸化炭焼成される。推定口径20.6cm。口縁部約10%の残存である。在地産であろう。2は陶器甕。胴部から頸部に立ち上がる部分と思われる。外面は軸状に見られる。胎土は砂粒を含み灰色で、焼成は極めて良好である。3は灰輪陶器底部。外面無軸。高台の削り出しは浅い。胎土は淡黄灰色。焼成良好。4は須恵器瓶類の体部と思われる。底部からの立ち上がり部分で、外面は平行叩きの後、軽く撫でられている。下方は寛削り調整される。胎土は白色針状物質を含み、明灰色で焼成良好。鳩山産。

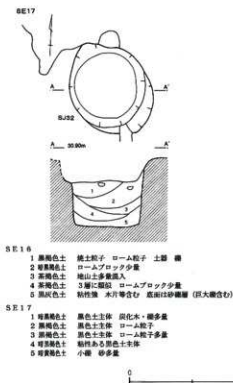
第17号井戸跡 (第56図)

第56図 第16・17号井戸跡



Q-9グリッドで検出された。第32号住居跡、第31号掘立柱建物跡と重複している。第32号住居跡より新しいが、第31号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。平面形は円形を呈する。第16号井戸跡と同じく、素掘り円筒状を呈する。直径は1.6mである。底面は直径1.1mで、深さは、検出面から1.06mと浅めである。覆土は黒色土が主体で、最下層は礫や砂を多量に含んでいた。

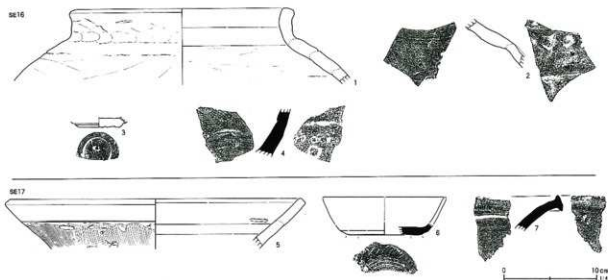
遺物は、須恵器環、甕片など9点が出土した。須恵器など多くは第32号住居跡からの混入物と考えられる。第57図5は捏ね鉢である。口縁部約20%の残存。推定口径31cm。直線的な体部から口縁部はわずかに内湾し、口端は平坦で断面方形を呈する。外面は口端から2.5cmの幅で横方向に撫でられる。以下は櫛歯状或いは木口状の工具で縦方向に撫でられる。暗赤褐色を呈し、良く焼き締まっている。6は須恵器環底部。約30%残存。推定底径8cm。底部周辺を寛削りしている。灰白色を呈し、焼成良好。白色針状物質を多量に含む。鳩山産。7は甕口縁部。5%残存。



- SE16
- 1 黒褐色土 焼土粒子 ローム粒子 土層 礫
 - 2 暗褐色土 ロームブロック少量
 - 3 黒褐色土 地山土少量混入
 - 4 黒褐色土 3層に埋没 ロームブロック少量
 - 5 黒灰色土 粘性强 木片等含む 底面は砂礫層 (巨大礫含む)
- SE17
- 1 暗褐色土 黒色土主体 炭化木・礫多量
 - 2 暗褐色土 黒色土主体 ローム粒子
 - 3 暗褐色土 黒色土主体 ローム粒子多量
 - 4 暗褐色土 粘りある黒色土主体
 - 5 暗褐色土 小礫 砂多量

0 2m 1:50

第57図 井戸跡出土遺物



オ 溝跡

第63号溝跡 (第58図)

O・P-9グリッドで検出された。第36号掘立柱建物跡、第16号井戸跡と重複する。後者よりは新しいが、前者との新旧関係は不明である。第35号掘立柱建物跡の約4m東に当たり、方向や長さもほぼ一致する。建物跡との时期的な関係などはわからないが位置関係からは建物を意識したとも考えられる。覆土は焼土を少量含む黒褐色土で、底面は比較的平坦である。検出された長さは6.8m、幅は0.54~1.2mである。深さは7~25cmである。

遺物は、土鍋や鉢と思われる小破片が3点出土したのみである。第59図1は鉢、口縁部5%の残存であるため、傾き及び推定した口径にやや無理があるかもしれない。胎土は石英、砂粒を含む。二次被熱しており赤橙色を呈する。酸化炭焼成される。

第64号溝跡 (第58図)

O-9-10グリッドからP-10グリッドにかけて検出された。調査区の北東隅に当たり、前回調査の第12号溝跡の続きである。A地点の第54号溝跡に対応する。第15号住居跡と重複し、これより新しい。今回検出さ

れた長さは12mである。前回検出分と合わせると62.4mとなる。幅は、0.85~1.4mで、深さは7~28cmである。

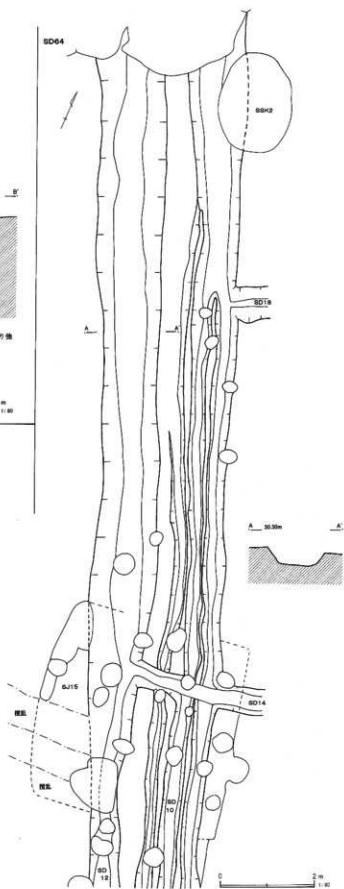
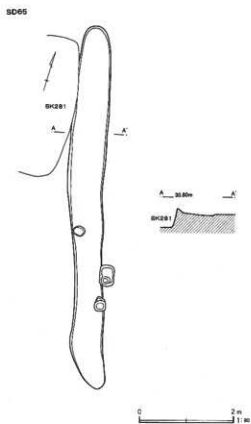
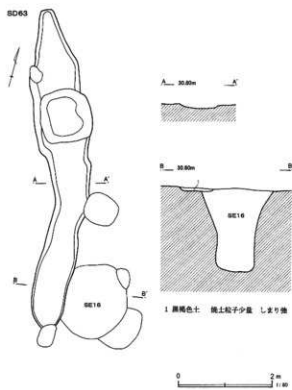
遺物は土師器・須恵器は小片が3点、灰釉陶器1点、土鍋や鉢と思われる破片が10点出土した。第59図2~4は鉢。2・3は表面の刺離が激しい。いずれも砂粒、礫を多量に含み焼成は軟質。2は推定口径28.6cm、灰色を呈する。3は推定口径29.2cm、赤褐色を呈する。4は残存5%の小片である。灰色を呈し、焼成は比較的良好。いずれも地産。5は灰釉陶器壺。推定口径12.8cm。7は常滑産甕胴部破片。6・8・9は須恵器甕破片。いずれも埴山産。5以下は混入と考えられる。

第65号溝跡 (第58図)

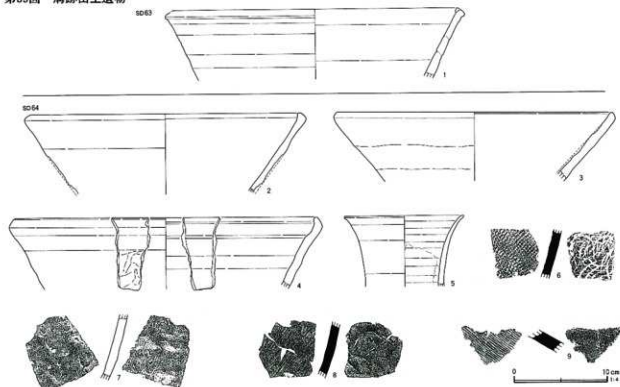
P・Q-10グリッドで検出された。第31号掘立柱建物跡の東約2mに位置する。第63号溝跡と同様の形態をとる。第281号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。検出された長さは7.7mである。幅は55~76cm、深さは6cmときわめて浅い。

遺物は、出土しなかった。

第58図 溝跡



第59図 溝跡出土遺物



カ 土壌

土壌は17基検出されたが時期の分かるものは少ない。また、大きめのピットと区別をつけにくいものもあるが、建物の柱穴の可能性の無いものなどを土壌として扱った。

第274号土壌 (第60図)

Q-10グリッドで検出された。竪穴状遺構の南側の2mに位置する。楕円形を呈するが西側が直線的である。大きさは長径78cm、短径57cm、深さは15cmである。主軸方位はN-50°-Wである。他の遺構との重複はない。底面は平坦であった。

遺物は、出土しなかった。

第275号土壌 (第60図)

Q-9-10グリッドで検出された。調査区の南に位置し、他の遺構との重複はない。隅丸長方形を呈する。底面は中央部がわずかに窪むがほぼ平坦である。覆土は黒褐色土を主体とするもので、焼土粒を含んでいた。大きさは長径98cm、短径83cm、深さは20cmである。主軸方位はN-85°-Wである。

遺物は、土師器細片4点が出土したが、図示できる

ものはない。

第276号土壌 (第60図)

Q-9グリッドで検出された。楕円形を呈する。第31号掘立柱建物跡の南辺に位置する。底面は平坦である。大きさは長径69cm、短径62cm、深さは9cmである。主軸方位はN-32°-Eである。

遺物は、出土しなかった。

第277号土壌 (第60図)

Q-9グリッドで検出された。第32号住居跡の南壁を壊して掘り込まれている。楕円形を呈する。大きさは長径1.12m、短径0.79m、深さは52cmで、軸方位はN-8°-Wである。

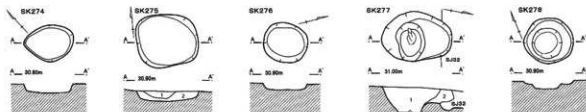
遺物は、須恵器甕小片2点が出土したが、図示できるものはない。

第278号土壌 (第60図)

Q-9グリッドで検出された。第32号住居跡の南に位置する。円形を呈し、底面に直径50cmの掘り込みがある。大きさは直径75cmで、深さは14cmである。

遺物は、出土しなかった。

第60図 土塚



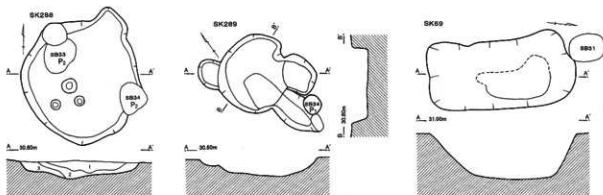
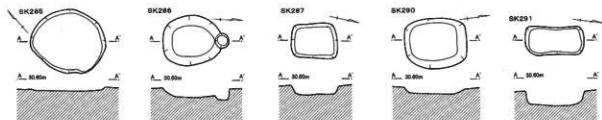
SK275
1 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒子少量・小礫
2 黒褐色土 黒色土主体 焼土粒若干・小礫

SK277
1 黒色土 焼土粒若干
2 黒色土 1層より厚い
3 黒褐色土 褐色土ブロック 粘性強



SK283
1 暗褐色土 黄褐色ブロック少量
2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒子少量・小礫少量 粘性強
3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒子若干
4 黒褐色土 3層に近縁 小礫少量
5 暗褐色土 黄褐色土ブロック (地山) 多量

SK284
1 暗褐色土 焼土粒 焼土ブロック若干
2 黒褐色土 焼土粒少量
3 黒色土 炭化物層 焼土ブロック
4 黒褐色土 2層に近縁 炭化物多量
5 暗褐色土 砂質土含む



SK288
1 暗褐色土 黒色土主体 コーム小ブロック・焼土粒・炭化物粒子少
2 暗褐色土 ローム質土主体 黒色土微量
3 黒褐色土 黒色土とローム質土を混じり混入



第280号土壌 (第60図)

P-10グリッドで検出された。第31号掘立柱建物跡の東側の底部分と重複するが直接の重なりはない。楕円形を呈する。大きさは長径1.09m、短径0.43mで、深さは17cmである。

遺物は、須恵器環細片が1点出土しただけで、図示できるものはない。

第282号土壌 (第60図)

Q-8グリッドで検出された。第31号掘立柱建物跡の西側の底部分と重複するが新旧関係は不明である。楕円形を呈し、大きさは長径78cm、短径68cmで、深さは13cmである。

遺物は、土師器細片1点か出土したが、図示できるものはない。

第283号土壌 (第60図)

P-8グリッドで検出された。第31号掘立柱建物跡の北辺で重複し、これより新しい。北側は擾乱によって上面を壊されている。また、東側上面には本遺構より新しいピットが1基掘り込まれている。平面形は楕円形で、大きさは長径1.86m、短径1.30mで、深さは65cmである。

遺物は、出土しなかった。

第284号土壌 (第60図)

P-9グリッドで検出された。溝状に擾乱された中にかろうじて残っていた。他の遺構との重複はない。隅丸長方形を呈し、大きさは長径1.27m、短径0.70m、深さは37cmである。長軸の断面は船底形を呈し、覆土には焼土の他に、炭化物を多量に含むのが特徴である。

遺物は、出土しなかった。

第285号土壌 (第60図)

O・P-9グリッドで検出された。第35号掘立柱建物跡と重複するが、新旧は不明である。楕円形で大きさは長径1.17m、短径0.97m、深さは6cmである。

遺物は、出土しなかった。

第286号土壌 (第60図)

O・P-9グリッドで検出された。第35号掘立柱建

物跡のほぼ中央に位置するが、建物跡との関係は不明である。楕円形で長径1.04m、短径0.76m、深さは16cmである。

遺物は、出土しなかった。

第287号土壌 (第60図)

P-9グリッドで検出された。第286号土壌の南に位置する。不整形である。長径0.74m、短径0.55m、深さは14cmである。

遺物は、出土しなかった。

第290号土壌 (第60図)

P-8グリッドで検出された。第33号掘立柱建物跡の東に位置する。隅丸長方形で、長辺が影らむ。長径0.97m、短径0.80m、深さは10cmである。

遺物は、出土しなかった。

第291号土壌 (第60図)

P-8グリッドで検出された。隅丸長方形を呈し、長径0.92m、短径0.41m、深さは24cmである。

遺物は、出土しなかった。

第288号土壌 (第60図)

O・P-8グリッドで検出された。だい33・34号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明。不整形を呈し長径2.20m、短径1.82m、深さは25cmである。底面にピットが3基検出された。

遺物は、出土しなかった。

第289号土壌 (第60図)

P-8グリッドで検出された。第32号掘立柱建物跡のほぼ中央に位置するが建物跡との関係は不明である。不整形を呈し、大きさは1.23mほどで、深さは25cmである。

遺物は、出土しなかった。

第69号土壌 (第60図)

Q-8グリッドで検出された。調査区南西部で前回半分ほど調査されたものの続きである。やや崩れたが隅丸長方形を呈し、長径2.34m、短径1.07m、深さ74cmとなった。

遺物は、出土しなかった。